2022 年度

チャペル講話集

関西学院大学社会学部

2023 年度　チャペル講話集目次

発行にあたって ……森　康俊… 3

Ⅰ．私にとっての「関西学院」

虹は何色（なんしょく）？ ……難波　功士… 7

関西学院と社会学 ……荻野　昌弘… 11

Ⅱ．地に平和を

ナイフと銃，そしてペン ……松宮　園子… 17

「山上の説教」と「味方する」のジレンマ ……Hans Peter Liederbach… 19

「自分らしさ」の回復を支える支援とは ……関　嘉寛… 22

文化人類学者が見たウクライナ戦争と平和 ……桑山　敬己… 26

平和とは何か？ ……三浦耕吉郎… 29

マスメディアの中立性と平和 ……稲増　一憲… 32

Ⅲ．私にとっての「チャレンジ」

The Challenge of Seeking Advice ……Vivian Bussinguer-Khavari… 39

外国語へのチャレンジ ……西村　正男… 43

新しい学び ……石田　惇… 47

私の大学生活 ……貴戸　理恵… 50

Ⅳ．みんなで生きる

グローバル化時代に必要な素養
——「マタイの福音」と現代ムスリムを通じて—— ……安達　智史… 57

一人で死ぬとみんなで生きる ……金菱　清… 60

「みんな」の内と外 ……今井　信雄… 64

話し合いについて ……吉田　寿夫… 67

Ⅴ．大切なこと

コスパを度外視し，本気で取り組んでみよう ……松村　　淳… 73
大切なこと？ ……内田　充美… 77
大胆に生きる ……Timothy O. Benedict… 80
今ここに生きるということ ……打樋　啓史… 83
同じ色の石を踏んでいく，踏んでいってしまう ……鈴木慎一郎… 88

Ⅵ．定年退職者による最終チャペル講話

ノイズとしての「社会」
——オンライン授業から考える ……田中　耕一… 93

発行にあたって

2022 年度社会学部チャペルアワーの講話集をお届けいたします．

この 1 年は対面でのチャペルを皆さんと共に過ごすことができました．参加くださったすべての皆さんに心から感謝申しあげます．

毎回，とても丁寧に，相当の時間をかけて準備を下さったお話を，当日聞くチャンスのなかった皆さんにもお届けしたい，そして，まとまった形で読んでいただけるものを作りたいという願いから，この小さな講話集を毎年刊行しています．

今年度は，春学期に〈私にとっての「関西学院」〉，〈地に平和を〉，〈私にとっての「チャレンジ」〉，秋学期に，〈みんなで生きる〉，〈大切なこと〉，〈クリスマスを前にして〉というテーマで，社会学部教員を中心に，学内外の皆さんから貴重なお話をうかがうことができました．

22 年 2 月に始まったロシアによるウクライナ侵攻は 1 年を経過し，和平の糸口さえ見えません．23 年 2 月に発生したトルコ・シリア大地震は，地震災害の被害の甚大さを改めて，私たちに突きつけました．絶望の中に，いかに希望を見出すことができるのか，関西学院大学の学びは，こうした重い問いに向き合うことから始まります．

社会学部は，これからもチャペルアワーで多くの皆さんと時間を共有できることを大切にしていきたいと思います．

社会学部長　森　康俊

Ⅰ．私にとっての「関西学院」

2022. 5. 19（木）

虹（なんしょく）は何色？

難　波　功　士

レインボーウィークによせて

私は 25 年以上ここで教えていますので，「私にとっての関学」という題を振られても何か話せるだろうと思っており，今回はそんなに用意もせずにいたのですが，昨日，明日しゃべらなくてはいけないということでさすがにプレッシャーを感じ，少し下見がてらチャペルに出てみました．時間割も変わっていて時間の配分もわからなかったので，雰囲気をつかんでおきたいと思って参加しました．

出た人はわかると思いますけれども，昨日は人間福祉学部長の武田先生がいろいろなお話をされていました．今，レインボーウィークをやっていて，キャンパス中に虹色のバナーがたくさん出ていると思いますけれども，セクシュアルマイノリティの人たちをエンパワーメントするような，そうした人たちに対する差別や偏見をなくすようなことに早めに取り組んできた関学は素晴らしいところだと思う，という話を最終的にはされていました．

私はレインボーウィークの趣旨には賛成です．素晴らしいし，それが関学の誇りだというのもわかります．ですが，少しだけ違和感を覚える部分があるという話を今日はしたいと思って来ました．ただし，レインボーウィークをものすごく批判したり，ダメだという話では全然なくて，最後には関学は素晴らしいという話に着地しますので，安心して聞いてほしいと思います．

何に違和感を持っているかというと，バナーを確認してもらうとわかるのですが，6 色の虹なんですね．私は日本語圏で生まれ，日本語を母語として育っていますので，虹の色は 7 色だと思っているのだが……，というところが少し引っかりのポイントなのです．昔は 7 色だったけれども，そのうちにグローバルスタンダードは 6 色だという話になって，今のみんなの認識は 6 色なのだろうかと気になりました．そこで虹のことを歌っている日本語の歌詞をいくつか見てみて，その辺どうなのかを昨日少しチェックしたので，まずそれをご紹介したいと思います．

虹にまつわる歌詞

私が虹は 7 色だと思ういちばんの要因として，1966 年の『ラブユー東京』というヒット曲があります．当時，私は 5 歳ですが，ものすごく鮮明に覚えています．黒沢明とロス・プリモスという男性コーラスグループが歌っていた曲です．その冒頭だけ少し読

み上げますと，「七色の虹が消えてしまったの　シャボン玉のようなあたしの涙」という曲です．本当にムード歌謡，昭和歌謡なのですが，「七色の虹が」と刷り込まれて育っていますので，私は虹が７色だとずっと思っていました．

また昭和の終わりの頃ですが，1984 年に松田聖子さんの『硝子のプリズム』という曲がありました．その曲もおぼろげに覚えていたので，今回，歌詞を改めてチェックしてみました．それをまた少し読みますと，「あなたとあの娘と私　硝子のプリズム　綺麗な三角形ね　赤・橙・黄・緑・青・藍・紫　もう…屈折しそう」という，何だかくだらない歌詞なのですが，作詞家を調べてみたら松本隆さんというとても有名な方だったのでスルーしておきます（笑）．そういうものが昭和の最後の頃に歌われていました．

その後を見ても，例えば 2013 年に，AAA（トリプル・エー）の『虹』という曲があったらしいです．私はそれを全然知らなかったのですが，今回調べてみるとそういう曲があり，GReeeeN が作詞作曲で楽曲提供していたようです．その中に「七色の光集めた虹」というフレーズがあったりもしますから，昭和だろうが平成だろうが，令和の今だろうが，日本語圏では虹は７色ということになっていると思うのに，どうしてレインボーウィークのバナーは６色なのだろうかというのが少し引っかかっているところです．

シンボルとしてのレインボー

そうなった理由をいろいろ考えていくと，まず気づくのはこういうレインボーウィークといった運動は，アメリカなど英語圏が発祥だったのだろうという点です．最初にゲイパレードのようなものが始まって，だんだんゲイ・レズビアン以外の人たちも集まって，セクシュアルマイノリティの人たちがレインボーパレードをしていくと．自分たちの共通のシンボルとして，たくさんの色から構成されている虹を選ぶというのは非常に当然のことだと思いますし，それが世界的に広がっていって今日に至るということはわかります．

しかし，虹を共通のシンボルにするという前提があるのだったら，それぞれでローカライズしていってもいいのではないかとも思います．本来虹の色はグラデーションになっているものだし，連続したスペクトラムなので，どこからどこまでを何色（なにいろ）だと考えるかというのは，それぞれの言語圏や文化圏によって別々であって当然なのです．

なぜ英語圏では６色なのかというと，多分インディゴブルーもブルーだという意識が強いのだと思います．しかし日本では，藍と青は違う色だという意識を割と強く持っているように思います．藍染めなどで藍という染料と長くつきあってきた歴史があり，虹の青と紫の間に藍色があると私たちは思うから，７色にカウントするのです．けれどもそうではない人たちも当然いるし，世界中を見てみたら虹が５色の人たちもいるし，８色だと思っている人たちもいます．ブルーを，ダークブルーと普通のブルーとライトブルーにわけてそれぞれに名づけしていたりすると，８色になっても不思議ではありません．なので，６色で統一する必要もないのではないかと，私は思います．

日本でのレインボーパレードなどを見ていても，やはり６色のマークを持ってみんな

が集まっています．別に日本でやる以上は 7 色にそろえろと言う気も全然ありませんけれども，何だかそこが少し引っかかっています．毎年この期間は「レインボーウィークが始まりますよ」ということで，教員も 6 色のチップのようなものを渡されて「これをいろいろなところに貼って広めましょう」と言われるのですが，趣旨には賛同するけれども，そのチップをいろいろなところに貼ることは私はしないという，何だかそういう微妙な抵抗の仕方をしています．

関学の寛容さ

ですが，大学全体でやろうとしていることに対して文句を言ったからといって，後で誰かに呼び出されて怒られるということもないですし，懲らしめられることもないというところ，自由にいろいろ好き勝手に言えるのが関学のいいところだと思いますし，特に社会学部はそういう気風の強い学部だと思っています．最低限のルールやマナーさえ守っていれば，ある程度何を言っても，どういう発想をしても，何を考えても許されるという空間が，割とここにはあるのではないかと，この 25 年間思ってきました．

1 年生の人が多いと思いますので，私を見たことがあるとすると，入学式の壇上に図書館長という肩書でいる，謎の人物だと思いますけれども，入学式の全部の回で私はずっと壇上で座っていました．同じように皆さんにとって謎の存在として，理事長という方もいらっしゃいました．理事長は，大学だけではなくて高校，中学，小学校，幼稚園など全部を含めた学校法人関西学院のトップで，経営の責任者のような人なのですが，そういう人もずっと入学式に出続け，フロアの皆さんと同じパイプ椅子に座っているのです．それは格好だけのことかもしれませんが，そういったあたりは，役割の違いこそあれ，神の前では基本的にはみんな平等だという気持ちはどこかで生きているのではないかと思います．だからこそレインボーウィークにも取り組んできたのでしょう．

しかし私のようにひねくれた人間にとってみれば，性の多様性を言う人たちが，文化や言語の多様性に無頓着でいいのかと少し違和感を覚えていて，今日はそういうお話をしました．けれども，そんな好き勝手なことをいろいろ言えるいい空間だと思いますので，皆さんにも関西学院を好きになってもらいたいと思いますし，25 年働いてみていろいろありましたけれども，いいところだなと思って私も働いています．

組織の富士山型／八ヶ岳型

少し時間があるのでもう一言だけ言いますと，私は関学に来る前に，12 年間会社員をやっていました．その会社は「粒ぞろいよりも粒違いがいい」というようなことを言う企業で，いろいろな個性が集まって何かを作ったほうがいいという感じの雰囲気はものすごくあるところでした．でも，若いうちはそうかもしれないけれども，その会社にずっと残っていると，やはりピラミッド状の組織なので，上を目指さなければ，トップにならなければという感じにだんだんなっていくのです．富士山型の組織だということだと思います．

しかし途中で関学に移ってみたら，富士山というよりは八ケ岳のような感じがして，先

生によっては研究で頑張る，教育で頑張る，社会活動で頑張る，大学・学部などの運営で頑張る等々，いろいろなところで何かしら頑張って貢献していれば，存在を認められるような感じがあるので，会社よりはずっと居心地がいいし，生きやすいところだと思いました．

大学とは本来そういうところだったと思います．ですが今，いろいろ大学の世界も厳しくなってきています．そうした中にあっても，伸び伸びと過ごせるいい大学，いい場所だと，関西学院大学のことを私は考えていますし，そういう雰囲気は学生さんにも伝わると思いますから，この場を好きになってもらいたいなと思っています．

（社会学部教授）

2022. 5. 26（木）

関西学院と社会学

荻　野　昌　弘

あなたがたに新しい掟を与える．互いに愛し合いなさい．わたしがあなたがたを愛したように，あなたがたも互いに愛し合いなさい．互いに愛し合うならば，それによってあなたがたがわたしの弟子であることを，皆が知るようになる．

（ヨハネによる福音書　13 章 34-35 節）

私は社会学を専門としていますけれども，関西学院大学の社会学部ではすでに 30 年以上教えています．私のゼミの 1 期生の息子さんも私のゼミに入っていて，2 世代続いているというかなりの古株です．私にとっての関西学院ということですが，私は社会学をずっとやっているわけですけれども，関西学院に来て一番強く感じたことは，キリスト教主義の大学である関西学院と社会学というものが実は非常に密接な関係にあるということなのです．

愛と裏切り

まず，先ほど読んでいただいた箇所はヨハネによる福音書の中で，イエス・キリストがポンテオ・ピラトに捕まってはりつけの刑になるわけですけれども，その前に残している言葉で，まず「あなた方も互いに愛しなさい」というものがあります．これはかなり有名だと思うのですけれども，この「あなた方も互いに愛しなさい」というのは，実は社会学においては非常に重要な意味を持っていると私は考えています．

それは 2 点あります．まず 1 点目は，人間同士が互いに愛するべきだと，人間同士の関係性について指摘しているのです．人間関係は愛をもってつくられるべきであると，人間の関係性について問題としています．これは非常に社会学的ですが，実はむしろ社会学が聖書から影響を受けていて，そして社会学においても，その人間関係というものが研究の対象になっていくわけです．

実はこの，隣人愛が価値であるという箇所の前と後ろの部分を見ると，これはぜひ見てもらいたいと思いますが，非常に興味深いです．キリストには寝食を共にする弟子たちがいましたが，その弟子の一人に裏切られるわけです．その後逮捕されて，はりつけの刑に遭ってしまいます．「互いに愛しなさい」と言う前に，「あなたたちのうちの一人は私を裏切るだろう」と言っています．そして「互いに愛しなさい」と言います．

その後に，また別の弟子のうちの一人が，

裏切りではないですけれども，キリストが捕まっても，「もしあなたが殺されたら，私も一緒に死にます」と言っていた弟子に，多分そんなことはなくて，「あなたは私が捕まった後に，３回私のことを知らないと言うだろう」と言っています．ですから，イエス・キリストとその弟子たちはずっと行動を共にして，その間に非常に深い関係が結ばれているように見えるけれども，実は弟子はイエスを裏切ってしまうということが起こるわけです．

ここは非常に需要なところで，「互いに愛しなさい」と言って，「何だ，そうか」と思うわけですけれども，実はその愛すること，人間関係が良好な関係のままずっと継続するということが実は非常に難しいと．本当に信頼していると言っていた人でも，人は簡単に裏切ってしまうということをイエスはお見通しであったということです．それにもかかわらず「互いに愛しなさい」と言っているわけです．社会学的に見ても非常に興味深いのは，人間関係のうちの，愛によって支えられるということがいかに困難であるのかということが，同時にここで分かるということなのです．

そう考えてみると，社会学の一番のポイントというのは，少数の人間同士の関係であっても，もっと大きな集団，あるいは社会であってもそうですけれども，その人間関係は束でできているわけで，その束をいかにつなぎとめて良好な社会をつくっていくかということです．それが実は非常に難しいという前提に立って，社会学は学問として存在しているわけです．その考え方の基本がこの聖書の中に，他にも幾つもありますけれども，あるということです．

冒険心と関西学院

そう考えてみると，関西学院の社会学科は1915年に日本で初めてできましたが，これは偶然ではないということなのです．実際に記録で分かっているだけでも，1904年からその当時の宣教師たちが社会学を英語で教えています．つまりその当時の関西学院にとって，社会学は非常に重要なものであるという認識がすでに，日本ではいち早くあったということです．

今でも「社会学を勉強しています」と言ったら「何，それ？　よく分からない」というようなことがありますよね．1915年の段階で社会学科をつくるというのはとんでもないことで，英断というべきか，あるいはあまりにも冒険が過ぎる，そういうことをあえてしたということは，実は先ほどお話ししたような，キリスト教と社会学との関係にあるのではないかと私は思っています．

そういう意味で，私にとっての関西学院というと，私は関西学院に来る前から社会学をやっていて，それで採用されて社会学部の教員になっているわけですが，関西学院の中に来てみて，社会学がどういうところで生まれてきて，どのような学問なのかということについて非常によく分かったということは，まず私にとっての関西学院であると言うことができるわけです．

それからもう一つ，社会学とも関わりますけれども，私にとっての関西学院の非常に良いところというのは，1915年に一体何なのかもよく分からないような，そして日本の中で教えることができる人が本当にいるのかどうかも分からないような，そういう社会学という言葉を使って社会学科をつくったとい

うことです．要するに，新しいものを積極的にどんどん取り入れていくという精神がずっと関西学院の中にあるということが，私にとっての関西学院であると言えると思います．

もっと言えば，社会学そのものは，すでにあるものをそのまま受け入れるのではなくて，何か新しいものを発見していくことに意味があるわけです．つまり今までは起こり得なかった現象，一番分かりやすいことで例えれば，今，皆さんが直面している新型コロナウイルスによる社会の変化ですけれども，そういう新たな事態に対して，どのようにそれを感情的にではなく捉えることができるのか，そしてそれに対してどう対応するべきなのかということを考えていくことが，やはり社会学の本来の目的であると言うことができるわけです．

そういう意味で，関西学院にはそうした新しいものを積極的に求めるという精神があるということは，私にとっての関西学院であると言えると思います．ですから皆さんも，せっかくそういういい学校に来たわけですから，これから何か，そんなに大げさなことでなくても，ささいなことでもいいので，自分で新たな挑戦や冒険に，ぜひ挑んでいっていただきたいと思います．それでは，これで私の話は終わりたいと思います．

（社会学部教授）

Ⅱ．地に平和を

2022. 6. 7（火）

ナイフと銃，そしてペン

松 宮 園 子

少年たちの「無力」

平和について，という非常に大きなテーマをいただいているのですが，今日は，私が授業で取り上げた映画をきっかけに考えてみたいと思います．1980 年代に作られたアメリカ映画『スタンド・バイ・ミー』を見たことがある，という方はいらっしゃるでしょうか．私も高校生くらいの時に見た記憶があるのですが，４人の少年たちが，よく晴れたアメリカの田舎町の青空の下，鉄道の線路をたどっていきながら経験するひと夏の冒険，という明るい友情ものの映画というイメージが漠然とありました．

しかし今回，改めてこの映画を見ると，社会的，そして肉体的にも非常に無力な４人の 12 歳の少年たちが，容赦ない大人や年長の高校生グループ，そして自分の家族にすら追いつめられる様がとても痛々しく，大きな衝撃を受けました．田舎町に住むこの少年たちは，森で行方不明になった男の子の死体を見つければ有名人になれる，と思い，それぞれの親に嘘をついて１泊２日の冒険旅行に出かけます．少年たちは皆，そもそも厳しい家庭環境にあります．リーダーのクリスの父親は酒に溺れて暴力をふるうことが日常であり，また高校生の兄はギャングの仲間で，その仲間と主に弟を攻撃するような人物です．またクリスの親友であるゴーディは，小説家を目指す頭が良く繊細な少年ですが，数か月前に田舎町のヒーローのような存在だった優等生の兄が自動車事故で死んでしまっており，打ちひしがれた両親はゴーディにまったく愛情を向けようとしません．ゴーディは両親が兄の代わりに自分が死んだほうが良かったと思っている，と信じるようになっています．

少年たちの「反撃」

このような少年たちが，ようやく苦労の末に行方不明の少年の死体を発見したとき，高校生のギャングが彼らの前に現れ，死体を横取りしようとします．体格も，また人数的にも完全に劣勢であるにもかかわらず，ギャングのリーダーの要求を，クリスはきっぱりと拒否し，彼を侮辱します．ギャングがナイフを振り上げ，思わず観客が目を閉じてしまいそうになるとき，ゴーディが隠していたピストルを空に向けて撃ち，そしてその銃口をギャングのリーダーに向けます．さすがのギャングたちも血の気を失い，すごすごと引き下がっていくその場面は，確かに胸がすくような思いになり，観客たちはゴーディがピスト

ルを持っていたことを有難く思わずにはいられません．

しかしもちろん，特に私たちが生きているこの現在の状況の中でこの場面を考えるとき，非常に重い，暗い気持ちがこみ上げます．か弱い，無力な者が，圧倒的な暴力によって襲われようとするとき，その暴力を上回る武器，さらなる力を手にする他には，身を守る道はないのでしょうか．そもそもゴーディが隠していたピストルというのは，クリスが酔っ払った父親からこっそりと盗んで，この旅に持ってきていたものなのですが，このピストルこそが少年たちの旅を無事に終わらせた，最高の立役者なのでしょうか．

暴力のゆくえ

非常に難しい問いなのですが，この映画はやはりそれに対して複雑な答えを用意しているように思えます．この映画は，大人になり，立派な小説家になったゴーディが自分の子供時代を回想する，という枠組みで構成されているのですが，そもそもゴーディが昔を思い出すきっかけとなったのは，映画の冒頭で映し出されるクリスの死を告げる新聞記事でした．厳しい家庭環境にもかかわらず，彼はゴーディからの励ましもあり，大学に進み，見事に弁護士となって働いていました．しかしある日，街で喧嘩の仲裁をしようとした彼は，ナイフでのどを刺されて命を落としてしまったのです．

大変な苦労を重ねて，貧しさと暴力の世界から脱して弁護士となった彼が，その正義感ゆえに再び暴力沙汰に巻き込まれ，そして犠牲となってしまうという最期は，痛ましいという他はありません．かつて森の中で，ゴーディのピストルによって逃れたはずのギャングのナイフが，あたかも亡霊のように大人になったクリスに襲いかかったようにも思われるこの顛末には，暴力の連鎖は終わらない，暴力を暴力で封じ込めることは一時的なのだ，というメッセージを，この映画は訴えているようにも思えます．

そしてかつて銃を構えてクリスを救ったゴーディが現在手にしているのは，武器ではなくペンであり――もちろん現代のことですから実際にはパソコンなのですが――そのペンで死んでしまったクリスをよみがえらせているのです．もちろん，「ペンは剣よりも強し」という言葉が，今まさに銃弾や爆弾にさらされている人々には何の役にも立たない，ということは，重い真実です．しかしその一方で，やはりこの『スタンド・バイ・ミー』という映画が名作とうたわれ，今なお多くの人々を惹きつけている理由は，この暴力の連鎖が最後には絶たれ，少年の日のクリスとの友情によって作家として生きる勇気を与えられたゴーディが，静かに文字を紡ぎだしているエンディングが，少年たちの夏の日の冒険，に留まらない大きなメッセージを発しているからだ，と思えてなりません．

（社会学部教授）

2022. 6. 15（水）

「山上の説教」と「味方する」のジレンマ

Hans Peter Liederbach

あなたがたも聞いているとおり，『目には目を，歯には歯を』と命じられている．しかし，わたしは言っておく．悪人に手向かってはならない．だれかがあなたの右の頬を打つなら，左の頬をも向けなさい．あなたを訴えて下着を取ろうとする者には，上着をも取らせなさい．だれかが，一ミリオン行くように強いるなら，一緒に二ミリオン行きなさい．求める者には与えなさい．あなたから借りようとする者に，背を向けてはならない．あなたがたも聞いているとおり，『隣人を愛し，敵を憎め』と命じられている．しかし，わたしは言っておく．敵を愛し，自分を迫害する者のために祈りなさい．あなたがたの天の父の子となるためである．父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ，正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである．自分を愛してくれる人を愛したところで，あなたがたにどんな報いがあろうか．徴税人でも，同じことをしているではないか．自分の兄弟にだけ挨拶したところで，どんな優れたことをしたことになろうか．異邦人でさえ，同じことをしているではないか．だから，あなたがたの天の父が完全であられるように，あなたがたも完全な者となりなさい．

（マタイによる福音書　5 章 38-48 節）

はじめに

6 月のチャペル共通テーマは「地に平和を」です．このテーマが決まった 3 月上旬には，ロシアのウクライナに対する侵略戦争が始まったばかりでした．すでに 3 ヶ月が経ったのだが，戦争はまだ続いています．毎日，私たちの心を痛める情報が様々なメディアにおいて報道されています．戦争が収束に向かうどころか，戦闘の激しさが増している一方です．このような状況に置かれている私たちには，先ほど打樋先生に朗読された「山上の説教」がいかなる示唆を与えてくれるのでしょうか．これからは，皆さんと一緒にこのことを考えていきたいと思っています．

「山上の説教」との出会い

個人的な話だが，私が「山上の説教」に出会ったのは 80 年代前半，いわゆる冷戦の時代中でした．当時は，東側ブロックと西側ブロックとがイデオロギー的に，経済的に，そ

して軍事的に対立していました．私の故郷ドイツの真中に両ブロックの境界線が走っていました．もし，戦争が起きてしまったら，ドイツは戦闘の最前線になる，というドイツ人の共通感覚をよく覚えています．こうした中，1980 年代初頭，ソ連が東ドイツの領土に核兵器を配置した，ということが明らかとなりました．そこで NATO は，恐怖の均衡を保つために，西ドイツに中距離核ミサイルを配備することにしました．NATO の決定に対して，何十万人もの人々が街頭に出て，核兵器配備に反対するデモを行いました．

その頃，ジャーナリスト，フランツ・アルトが「平和は可能だ」というタイトルの本を出版しました．副題は，「山上の説教の政治」でした．いうまでもなく，NATO の決定を批判する人たちの間では，この本は非常に人気があったが，いわゆる専門家の間では，現実離れしていると揶揄されました．山上の説教の政治は，ナイーブな理想主義者のためのものだ，と言われました．ここでは詳細は省くが，私にとってこの本の中で特に興味深かったのは，東西の相互依存関係を分析している点です．著者にとっては，東側も西側と同様に，自らの存在を正当化するために，敵のイメージとして相手を必要としたことが相互依存の関係であった．

「味方する」とは？

ウクライナ戦争も同じロジックだと言えないだろうか．つまり，私たちにとって，この戦争で誰が味方で誰が敵かは非常に明確です．もちろん，国際法を犯し，数々の条約を破ってきたプーチンは，私たちにとって敵です．一方で，攻撃されたウクライナ人の側に立たなければならないこともはっきりしています．

しかし，「ウクライナに味方する」とは，具体的にどういうことなのでしょうか．もちろん，人道支援に反対する人はいないけれども，軍事援助となると，状況はより複雑になります．ヘルメットや防弾チョッキの提供は確かに同意できますが，武器の提供はどうでしょうか．特に戦車や火砲などの重火器の供給については，意見が分かれるところです．懸念されるのは，これが火に油を注ぎ，いたずらに戦争を長引かせることにならないかどうかです．とはいえ，ウクライナに味方するということの意味については，さまざまな解釈や意見があります．いずれにしても，専門家や政治家の中に，「山上の説教」にある「敵を愛せよ」という理想にウクライナが従うことを勧める人がいないのは当然でしょう．少なくとも私は，今までそのようなアドバイスを聞いたことがありません．

「敵を愛せよ」という常識との訣別

攻撃を受けているウクライナ人に「あなたの頬を打つ者には他の頬をも向けてやりなさい」を勧めるのは常識に反しているが，しかし実際，山上の説教は，常識との決別を原則として宣言している文章です．このことは，旧約聖書で「目には目を，歯には歯を」と書かれていることと比較すれば明らかになります．イエスはこの報復の論理と決別し，敵を愛するという根本的な代替案を示しているのです．それなのに，攻撃を受けているウクライナ人にこの代替案を勧めることはできません．誰がウクライナ人に「ロシアの侵略者を

愛しなさい」と言えるでしょうか．そして，この部屋の中で誰が自発的に「他の頬を向けてやる」のでしょうか？私たちはひどいジレンマに陥っているのです．敵を愛するという論理をウクライナ人に勧めることもできません．なぜなら，それはロシア軍がウクライナ全土を征服してしまうことになり，戦争犯罪，虐殺，レイプがもっと増えるからです．一方，武器を供給することでウクライナを支援すれば，戦争の長期化と犠牲者の増加につながります．私たちはどちらか一方を心より望むことはできないのです．では，このようなジレンマに直面している私たちに，山上の説教は何を語ることができるのでしょうか．

出口のないジレンマ

デンマークの哲学者キルケゴールは，このジレンマに耐える方法を示してくれます．キルケゴールに従えば，私たちが直面しているジレンマは，キリスト教徒であることのジレンマなのです．キルケゴールにとって，キリスト教徒であることは，毎週日曜日に教会に行き，讃美歌を歌うことではありません．さて，私が説教をしたいのかと思われるでしょうが，それは本意ではありません．キルケゴールの考え方を紹介したいだけです．彼が考えるように，私たちは「山上の説教」が掲げる極めて高い倫理的水準には到底及べません．挫折し，絶望するしかないのです．キルケゴールにとって，キリスト教徒であるということは，この挫折に耐え，絶望の中で神の恵みを願うことにほかなりません．言い換えれば，キルケゴールにとって，ジレンマの解決はないが，救済の希望があり，それによってジレンマに耐えることができるのです．

ウクライナ戦争に話を戻します．私たちが直面しているジレンマは，私たち人間が耐えなければならない最も困難で深いジレンマなのです．今ここにいる私たちにとって「山上の説教」の重要性は，このジレンマを指摘することにあるのかもしれません．つまり，私たちはウクライナを軍事的に支援し続けるが，それは軽々しく行うのではなく，その支援が引き起こす苦しみと犠牲を知った上で行うのです．つまり，ある意味，リアルポリティクスの要請に従わなければなりません．しかし，あらゆる現実的な政治的制約があるにもかかわらず，山上の説教は，リアルポリティクスだけでは戦争に対する十分な答えにはなり得ないという洞察に私たちを導きます．なぜなら，遅かれ早かれこの戦争も終わり，その時には報復の論理を放棄し，互いに許し合うことを学ばなければならないからです．第二次世界大戦後のヨーロッパの歴史，特にドイツとフランスの和解は，そのような許し合いが可能であることを私たちに示しています．ロシアとウクライナの間でも，そのような許し合いが必要であるでしょう．今日も明日も和解はありませんが，それは必ずやってきます．それまでは，ジレンマに耐えなければならない．山上の説教は，そのために必要な謙遜を私たちに教えてくれています．

（社会学部教授）

2022. 6. 22（水）

「自分らしさ」の回復を支える支援とは

関　　嘉寛

被災者とはどんな存在か？

私は主に自然災害を中心に，いろいろな被災地に行って，被災者と呼ばれている人たちの声を聞きながら，学生さんなどと一緒に復興を見守る研究と活動をしています．今回は人権ということが大きなテーマですが，被災地での研究活動を通じて感じたことを皆さんと共有して人権について考えていければと思っています．

突然ですけれども，皆さんはどんな災害を経験したことがありますか．例えば，先週でしたか，石川県のほうで大きな地震がありました．そういう地震もありますし，最近だと毎年のように起こる水害というものもあります．もしかしたらこの中にも，11 年前にあった東日本大震災で大きな被害，あるいは何かを感じたことがあった人たちもいるかもしれません．先ほど考えたら，皆さんが大体小学生ぐらいの頃に起こった災害かと思います．

そういった災害では，被災者といわれる方がいます．皆さんは被災者というとどのような人をイメージされますか．家をなくした人，大切な人を傷つけられたあるいは亡くしてしまった人，さまざまな被災者の像があると思います．その中でもまず重要なことは，被災者というのは，特別な存在として「被災者」ではないのだということです．何を言っているかというと，被災者という人たちは，災害が起こる一秒前まではみんなと同じ普通の生活をしていた人たちなのです．

普通に生活していた人が，被災者になった瞬間にその人たちはいろいろなものが奪われてしまいます．でも，奪われた状態になったということを肯定すると言ったら変ですけれども，「被災者なんだからその程度でいいよね」とか，「被災者なんだから我慢しなきゃいけないよね」ということがよく言われたりします．それは本当にいいのだろうかということを，被災地に行くとまず感じるのです．

実はそういったことは，外から被災地に行く私たちが何となく思うだけではなくて，被災者となった方々にも「被災したのだから仕方がないな」という雰囲気で過ごされる方がいっぱいいます．ある時，打樋先生とも一緒に行った，岩手県の北のほうに野田村で活動した時に「何かお手伝いしましょうか」と私が言ったら，「いや，他の人のほうがしんどいから．私は大丈夫」とすぐにいわれてしまいました．

しかし繰り返しになりますが，彼らは一秒前まで本当に普通に暮らしていたこの生活を，あっという間に奪われてしまった人たち

なのです．権利や人権ということを考えると，彼らは本当に私らのように暮らす権利を災害によって一瞬にして失われていった人たちなのです．

権利を奪われた被災者が普通に暮らす支援とは

私らは外から支援や復興活動という形で入っていきます．その時に，私らはどのようなことを考えて活動したらいいのか，あるいはしているのかということを考えなければなりません．もちろん，被災された方々の生活をなんとか取り戻したい，普通に暮らす権利を回復させたいと思って活動します．権利のような難しいことは考えませんが，なんとかして普通の生活に戻ってほしいと思ってサポートしようとするのです．

そうすると次に，では何をサポートしたらいいのだろうかと考えます．何ができるのだろうかと考えるのですが，多くの人たちは，最初に行った時にまず何をしたらいいかなど，なかなか分からないのです．何せ普通には暮らせない状況が広がっています．モノも，建物も，服もありません．「映画の一シーンの中で暮らしているようだ」と言っていた被災者の方もいらっしゃいました．

そのような中で暮らしている被災された方たちに，私らには何ができるのだろうかと考えなければなりません．分かりやすいのはもちろんお金，あるいは衣食住といった，基本的な生活で暮らすための最低限のものを提供することです．目に見えて不足しているものなので，それを提供したらなんとか頑張ってくれるのではないかと考えたりします．

ただ，今，最初に言った普通に暮らすといったことをした時に，食べるもの，着るもの，住むところ，全部を前提にしていますよね．しかし，これだけで普通に暮らしが可能かというと，決して普通の暮らしではないのはすぐ分かると思います．これらの他に，友達が要る，家族が要るという人がいるかもしれません．さらに，楽しいことが要る，自分の趣味が要る，あるいは仕事が要るというように，いろいろなものがあってみんなの普通の暮らしというものが出来上がっていると思うのです．

ということは，一秒前まで普通に暮らしていた人が普通に戻ることをサポートするために私たちができることは，お金や衣食住の最低限のものを提供するだけで十分だろうかということを考えているのです．被災者の方が普通の人として暮らすために必要なものは，本当はもっとあるのではないでしょうか．もちろんそういったものも必要なのですけれども，それ以外にも実は必要なのではないかと思って，時間をかけて活動をしています．その普通の暮らしの中で，安全に暮らしたい，あるいは生きていくために必要最低限のものが欲しいという以外に，やはり自分らしく生きたいというところに，私たちには何かサポートできることがないだろうかと考えています．

自分らしく生きることをサポートするために必要なこと

では自分らしく生きるために，私たちが外からできることは何でしょうか．これはとても難しいことだろうとも思います．ある人権NGOのホームページを見て，「なるほど，これだ」と思ったことがありました．それは

災害とは全然違うテーマで書かれていたのですが，その中に「まずあなたにできることは何ですか」ということが書いてありました．それは何かというと，「関心を寄せること」だと書いてありました．これは災害の時のサポートと一緒だなと思いました．

東日本大震災は 2011 年 3 月 11 日に起きました．実は 2012 年 3 月 11 日に社会学部の 20 人ほどの学生が，ボランティアバスで野田村に行きました．野田村で，いろいろな活動をしていったら，被災された方から「わざわざ来てくれてありがとう」と声を掛けられました．続けてこのようにおっしゃりました．「でも，あしたはもういないんでしょう」と．

どういうことか一瞬分からなかったのですが，その方にとっては，3 月 11 日まではみんなが関心を持ってくれるけれども，12 日からは誰にも関心を持ってもらえないのだろうということを伝えたかったのだと私は思いました．そして，この関心を持ってもらうということがその方にとって，自分らしく生きる，あるいは普通に生きる上で重要で，それが奪われてしまう，あるいは足りていないという不安を表していたのだと思いました．ということは，先ほどの人権団体のメッセージでもないのですが，私たちが被災された普通の人たちが自分らしい暮らしを送るためにどのようにサポートできるかと考えた時に，第一に「関心を向ける」ということがすごく重要だろうと思っています．

大学生だからできる「関心を向ける」とは

では，関心を向けるということはどうやったらできるのでしょうか．まず一つ，大学生だからこそできる関心を向けるということは，まずそこに行くということかと思います．そこに行くということが，このコロナの状況でなかなかできないことがあると思うけれども，まず行くということは，関心を向けているということを伝えることができる大きな行為だと思います．そこで何ができるかどうかはいろいろあると思うけれども，行くということはすごく大きなことかと思います．

そういった関心を向けて，目の前に立って寄り添うということも重要なことですが，二つ目の大切なことは，自分が感じたこと知ったことを他の人に伝えていくということだと思います．行って，「こんなだったよ」「こんなことができるかもしれない」「この人，どうしているかな」というように，話題をつくっていくことが重要です．大学生はいろいろなネットワークを持っているので，そこから関心を広げられるのではないかと思います．

そして三つ目は，自分がそこでの経験を得てどのような成長をしたかということを伝えていくことだと思っています．被災地で交流をずっと続けていて，そのお母さんからは「第二の息子だ」と言われた卒業生がいました．そのように関心を向けてつながっていくことによって，実は被災された方が自分らしく生きるということを，間接的かもしれないけれどもサポートしていけるのではないかと考えています．

新型コロナ禍で，行って知るということは難しい状況ではあるかもしれませんが，大学生という立場を使って，ぜひ皆さんには，関心を向ける，可能であれば行ってみる，あるいは行った人から話を聞く，そしてそれを通じてみなさんが成長していく，学んでいくと

いうことで，被災者の人権，あるいは普通に暮らす権利ということを考えてもらえたらと思います．

（社会学部教授）

2022. 6. 23（木）

文化人類学者が見たウクライナ戦争と平和

桑 山 敬 己

目の前で展開される歴史

2022 年 2 月 24 日，ロシアがウクライナに軍事侵攻しました．1 年生の皆さんは，まだ受験を終えたばかりで，世界情勢にまで頭は回らなかったかもしれません．また，2 年生以上の皆さんは春休み中で，ゆったりとした気分でいたことでしょう．今でもあまり真剣に考えていない人がいるかもしれません．

しかし，多くの識者によれば，この出来事は第 2 次世界大戦後の世界秩序を，根本から変えてしまうほど大きな意味をもっています．歴史は教科書に載っている過去の出来事ではなく，私たちの日常生活に生起しているのだということを，皆さんにはまず覚えておいてほしいと思います．

構造主義と二項対立

では，多大な犠牲をウクライナとロシアの双方で出しているこの戦争を，私の専門である文化人類学から見たら，どのようになるでしょうか．すべての現象は複数の異なる角度から見ることができます．また，同じ学問でも研究者によって考えは違います．それを承知で，私は「構造主義」という理論と関連させて，今回のことを考えてみたいと思います．

20 世紀最大の人類学者と言われた，フランスのクロード・レヴィ=ストロース（Claude Lévi-Strauss）に代表される構造主義は，「二項対立」という考えを基本にしています．世界を対立する二つの要素，たとえば善と悪，上と下，白と黒などに分けて，それぞれの特徴を相互の関係から見い出そうとするのです．

白と黒を例に考えてみましょう．今日の日本の結婚式で，花嫁が着るウェディングドレスは何色ですか？　言うまでもなく白ですね．では，お葬式のときの喪服は何色でしょう？　これも言うまでもなく黒です．白と黒を間違えたり意図的に入れ替えたりしたら，大変なことになります．

しかし，かつて日本の武士が切腹するときに着た死装束は白でした．現在でも，亡くなった方には白を着させることがあります．また，お隣の韓国の葬儀では，故人の家族親族の女性の多くは白の喪服に身をまとっています．

そうすると，白や黒には時空（時間と場所）を越えた普遍的な意味はない，ということになります．現在の日本の冠婚葬祭で，白がめでたいことを表し，黒が不吉なことを表

す――少し難しく言えば「象徴」する――のは，それぞれの色に本来備わった意味があるからではなく，白の逆が黒，黒の逆が白だからに他なりません．つまり，「吉」と「凶」という対立する二項を比較して，初めて各々の意味が分かるのです．

もちろん，すべてがこのように説明できるわけではありませんが，構造主義における二項対立とは，以上のような考えを示します．

戦争の裏返しとしての平和

ここでウクライナ戦争に戻ってみましょう．ロシアによる突然の侵略行為を目の当たりにして，日本でも国防に関する議論が一気に白熱化してきました．それは 2022 年 7 月の参議院選挙の焦点の一つでした．その後，岸田政権は従来の国防に関する考えや予算を大幅に変更しました．こうした状況下で，第 2 次世界大戦後の「平和国家・日本」という理念を守れという声も，戦争世代を中心に根強く聞こえてきます．判断は皆さんにお任せしますが，大切なことは，どうやら私たちは戦争という事態に接して，初めて平和について真剣に考えるらしい，ということです．

戦争と平和という二項対立から，具体的に何が分かるのか．どのような行動指針が得られるのか．それは皆さん自身で考えてみてください．答えのある小さな問いについて考えるより，答えはなくても大きな問いについて考えるほうが数段大切です．

二元的世界観を越えて

最後に，構造主義の一つの問題点について触れます．それは，なぜ対立は二元的なのか，多元的とは考えられないのか，ということです．要は，二項対立ではなく三項対立や四項対立，そういった可能性もあるのではないのかという疑問です．

現在，多くの国で批判されているロシアのプーチン大統領は旧共産圏の出身なので，アメリカを中心とする旧自由主義圏に対する根強い不信や敵意がある，と報道されています．また，私たちが住んでいる東アジアでは，アメリカと中国という二つの大国が，覇権を争うようになりました．私が大学生だった 1970 年代半ば，中国はまだ文化革命の時代でしたので，まさに隔世の感があります．

このように世界を二項対立的に見ると，私たちは物事がスッキリと分かったような気になります．しかし，こうした白黒をはっきりさせる構図は，本当に現実を反映しているのでしょうか．ひょっとして，世界を二つに分けて考えるという発想そのものに，問題があるのではないでしょうか．

この問いに出来合いの答えはありませんが，考える材料として，禅（仏教の一派）を 1960 年代に世界的に広めた，鈴木大拙の言葉を紹介します．『東洋的な見方』（1963 年）という本の冒頭で，鈴木は次のように言いました．普段はあまり気にならないが，何か問題にぶつかると，西洋人はまず物事を分けて考えるのに対して，東洋人は未分化から出発する，と．

西洋と東洋という範疇はあまりに大雑把ですし，それ自体が二項対立的ですが，「分ける」という発想が西洋で生まれた構造主義の根底にはあることは確かでしょう．

新しい世界観を自ら打ち出す力を

関西学院大学の社会学部で学んでいる皆さん，そして日本および世界の将来を担っている皆さんには，こうした根本的問題について自分の頭で考え，新たな見方なり世界観を打ち出してほしいと思っています．

今日の短い話が，地に平和をもたらすために私たちは何を考え，何をすべきなのかを考えるきっかけとなれば，一教員として嬉しく思います．

（社会学部教授）

2022. 6. 29（水）

平和とは何か？

三　浦　耕吉郎

はじめに

今日のチャペルは「地に平和を」という題目ですが，やはり，この時期に平和について考えるなら，今まさに，ヨーロッパで生じている悲惨かつ残虐な出来事を想起せずにはいられません．ですから私としては，今回のテーマは結局のところ「平和とは何か」という問いかけとして受けとめて，今日はそういう形でお話ししたいと思います．

ルカ書へ

何回かチャペルでお話ししましたけれども，そのお題として，聖書の言葉が挙がったのはこれが初めてです．といいますのも，これまでは私の講義科目と関連した「人権について考える」といった一般的なテーマでお話しすることが多かったからです．しかし，このたび「地に平和を」ということで，これはいったい，どうしたものかと思い悩み，とりあえず聖書の中にこの語句がどのような文脈で現れてくるのかを，最初に確認してみることにしました．

これは，ルカ書にある箇所なんですね．そして，まさに，イエスが誕生した時の出来事という形で書かれていることを再確認いたしました．そうして，ここでの「地に平和を」という言葉のすぐ後には，「主の御心にかなう人であれ」といった言葉が続くのですが，聖書のこの箇所で言われている「平和」というものの内実を，簡単に短く一行でまとめますと，〈救い主の誕生という出来事によってもたらされる，人々の宗教的覚醒の結果としての平和〉として私は受け止めました．後で打樋さんに，その理解がそれでよかったか，確認したいと思いますけれども…….

まぁ，そうはいっても，この時のイエスはまだ生まれたばかり．生後 1 日もたっていません．そこで，きわめて興味深いのは，ここでの宗教的覚醒を得た人びとというのは，お告げによってイエスの誕生を知っていた，ほんの一握りの人たち，それも，いわば社会の周縁に生きる羊飼いだったという点です．

そこでいわれる「平和」（とそれをもたらす覚醒）とは，キリスト教が世界宗教化する以前の，いわば原始キリスト教がはぐくんでいたような，羊飼いの人たちのきわめてローカルかつ独特な親密さのなかにあってのみ存在しうる「平和」だったのかも知れません．

二つの問い

2,000 年前のその当時と今とでは，いくら平和という言葉が同じでも，イメージするところはすごく違っているはずです．しかも私はクリスチャンではないから，ここでいう平和というものも，おそらく聖書とは外れたイメージにならざるをえないと思います．

ただ，この聖書の文脈との関連で考えると，次のような問いが生まれてきました．聖書の中ではまさにイエスが昨日生まれたという認識のもとにあるわけですが，私たちがいる今は，救い主というのは姿を見せてはくれない，そういう時代なんだと思います．そういう時に，私たちはいったいどのような覚醒を自らのものとしうるのか，という問いが一つです．それからもう一つは，この「地に平和を」という言葉の次にある，「神の御心にかなう人であれ」という場合の，その「御心にかなう人」とはどういう人なのだろうか，ということです．これは現在の状況のなかで，ということですよね．当時はまだ羊飼いだけだったのですが……．ともかく，そういう問いを私は導き出しました．

現代の社会学的覚醒

ここで話が一気に世俗化するのですが，私にとって覚醒というと，仕事で社会学をやっていますので，宗教的覚醒というものはなかなか僕には訪れないですけれども，やはり社会学的覚醒というのはいろいろな形で自分なりに体験してきているつもりです．特にここ数年間は，嫌というほど社会学的覚醒を促されてきたというのが事実です．

春学期に人権・差別問題論を毎年担当していますが，ここ数年，授業の最初に毎回同じせりふを言いました．つまり「私は社会学をやっていますけれども，こんな社会が来るなんて想像できませんでした」と．ある意味，すごく恥ずかしい言葉ですけれども，そういうことをここ毎年言わないといけないような状況になっています．

まずはコロナ禍ということです．コロナ禍が局地的にエンデミックのような形で起こることはいくらでも想像できたと思いますが，全世界規模のコロナ禍というのは，想像していた研究者もわずかにはいただろうとは思いますが，私自身は全く予想できませんでした．

それから今年の４月には「まさかロシアが侵攻するとは予想もできなかった」と，また言わざるを得なくなりました．けれども，他にいろいろ見ていると，政治学者のなかにも「自分も長い間政治学をやってきたけれども，ロシアが侵攻するとは思いもしなかった」と，告白する人もいました．

その人は，これまで自身がやってきた国際政治学の枠組みを全部壊して，また全部つくり変えなければならない，ということまで言われていました．こういう認識も，やはりそれぞれの人にとっての覚醒なのでしょう．しかし，いずれも，ものすごくネガティブで，想像もできなかったようなことです．こういう覚醒を経た以上，僕らは来年の春には，どのようなことが起こっていても，「少しは予想していたけれども，やはり起こってしまったな」というぐらいの賢い研究者になりたいと思いますが，でも絶対に無理だろうとも思っています．

原初の平和を思い出すこと

そろそろ最後のまとめに入ります．では，その覚醒によって，私自身はどのようなことを積極的に考え直そうとしているかというと，やはり平和という日常に対して，パンデミックや戦争，もっと 10 年さかのぼると，原発事故も，「まさかそんな事故が起こるとは予想もできなかった」と，やはり授業で言っていましたが，そのようなものを普通は非日常と位置付けますよね．でも，もちろんその非日常の中で，私が専門とする人権侵害の問題や差別の問題も，今回のパンデミックの中でも，ロシアの侵攻においても，数え切れないほど山のように出てきているわけです．そういうものを非日常と位置付けていた私がいました．

かつて，平和が日常だったことがあったとしても，もう今や，いかに平和を回復するかなどということを軽々しく言えないような状況です．ウクライナでの平和の回復などということはなかなか見通せません．つまり非日常と日常という二分法にずっと寄りかかって，毎年「予想もしなかった」と言い逃れてきたのだったと，私は深く反省しています．非日常と日常の二分法，たとえば非日常から……，戦争から平和へ，パンデミックからパンデミックのない世界へというような，そういう二分法ではもう駄目なのではないかと思いました．

例えば，ちょうど今日の差別問題の授業では「日常性の中の差別」というテーマをやっていますが，差別というものも，「私がまさか差別をするとは思わなかった」というように，する側から見たら非日常なのです．日常的に私は差別しているなどと思う人はいません．けれどもされる側の人からすれば，いつされるか分からないというのが多くの差別であって，日常的に差別を受ける可能性に常にさらされているのが差別される側の人たちであるわけです．僕は元からそのように考えていて，日常性の中の差別，日常性の中にこそ差別が根を張っているという発想です．

それでこの二分法を見直す時に，今日最初に挙げました，ルカ書での「地に平和を」という意味での平和の現れというのは，ある意味で二分法が成立する以前の，原初の状況のようなところを指しています．そう考えると，二分法の見直しのためには，聖書のあのくだりからも何かのヒントを得ることができるように思います．

つまり，これまで日常イコール平和と考えてきたけれども，実は日常であり平和に見えていたわれわれの生活の中で，パンデミック，戦争，原発事故であったり，差別や人権侵害であったりというものの根が孕まれているということを，もっときちんと見て，きちんと意識化していかないといけないんだろうと．別の言い方をすると，非日常と日常の二分法の見直しというのは今までも何回も繰り返されてきたはずなのに，もう一回，この n 回目の見直しを今やらなくてはならない時期なのだろう，それが原初の平和を思い出すことにつながるのではないか，というのが私なりの見解です．

（社会学部教授）

2022. 6. 30（水）

マスメディアの中立性と平和

稲　増　一　憲

はじめに

私の専門は社会心理学でして，中でもメディア・コミュニケーションと世論を専門としています．「地に平和を」という非常に大きなテーマを頂いて，何をお話ししようかと考え，悩みました．もう少し身近なテーマ，身近なところでの平和についてお話ししようかとも思ったのですが，今回，まさにこのテーマが定められた第一の理由であると考えられるロシアのウクライナ侵攻に関連して，私の専門であるメディア・コミュニケーション研究の観点からお話ししたいと思います．

テレビと中立性

まず，メディアの話から始めたいと思います．テレビ，あるいはラジオは電波というものを使って放送していますが，電波は非常に貴重な資源なのです．貴重であって，誰でも使えるわけではありません．もしこれが誰でも使えるのであれば，たとえばある意見を言ったら，それに対して別の人も電波を使って反論を発信可能です．誰でも反論可能というのは，インターネットはそうですよね．インターネット上で発信された意見に対しては，誰でも反論できるので，これは何を言ったとしても批判や反論はされるけれども，法律によって規制されるということは基本的にはありません．よほど他者の人権を傷つけるようなものについては規制の対象になりますけれども，それ以外は基本的に意見が規制されることはありません．

ただ，テレビに関しては誰でも放送できるわけではないので，放送法という法律があって，政治的に中立であるべきということが定められています．この法律を破ると大変なことになります．かつてテレビ朝日というテレビ局に，中立性を侵すような発言をした社員がいました．これが国会でも取り上げられ，免許の取り消しまで議論されて，その結果，担当の責任者が更迭されて辞任して，それでなんとかテレビ朝日は存続できたということがありました．

ロシア・ウクライナ戦争におけるテレビの中立性

したがって，テレビの中立性というのは非常に重要なのですが，ロシアのウクライナ侵攻に関して，皆さんがすぐに思いつくのではないかと思うのが，この報道において日本は中立なのかという疑問です．つまり，先ほど打樋先生に正義という箇所を読んでいただき

ましたけれども，ウクライナとロシアという2つの側があり，両者に正義があるのだったら，どちらも取り上げなければいけないのではないかという疑問を抱く方も，多いのではないかと思います．

この問題において，日本のテレビはウクライナとロシアの間で中立性を保たなくても良いのでしょうか．これに関して僕の結論を最初に言いますと，ロシア側の主張は取り上げなくても，これは中立性には反するかもしれないですけれども，問題ないというものになります．つまり現状で日本がウクライナ寄りの報道をしていたとしても，それは許容できるということです．ただ，その結論を正当化するのはそんなに簡単な話ではないと思います．その点についてお話ししたいと思います．

みんなが正しいと思っていれば中立でなくとも構わない？

まず考えられるのは，日本の世論の分布による説明です．日本のテレビは政治的に中立でなければいけないという話ですが，日本の中でロシア側の主張を支持する人はあまりいないわけです．あるいは，日本でいろいろな立場の人を代表する政党があります．たとえば自民党，立憲民主党，維新の会，共産党，公明党などですが，こういった政党の中で，ロシア側の立場に立つ政党は1つもありません．基本的にはウクライナがやっていることが正しいのであって，ロシアがやっていることは間違っているという立場に，全ての政党が立っています．となると，日本国内で表立ってロシアの立場を持つ人は，ほとんどいません．だったらこれは別にテレビで意見を取り上げなくてもいいという考え方になるかもしれないということです．簡単にいえば，日本ではみんなウクライナが正しいと思っているのだから，それで良いのではないかということです．

しかしここで皆さんに思い出してほしいのは，第2次世界大戦において，日本国民の多くが戦争を正しいと信じて支持していたということです．そして政党を解散して大政翼賛会という一つの団体に結集し，マスメディアもその状況に対応して，「この戦争は正しいのだ」と伝えたわけです．みんなが正しいと思ってやった結果の戦争が，日本国民に対しても，周辺の諸国に対しても非常に大きな悲劇となる結果を招きました．そういう意味では，「みんなが正しいと思っているからこれで良いのだ」という主張は正当化できないだろうと思います．

国際法による正当化

そうだとすると，ではどうやって正当化できるかということですが，これは少し難しい話というか，硬い話になりますけれども，国際法という国と国との関係を扱うような法律があり，現代の国際法では武力行使は完全に違法となります．武力を使って領土を変更する，つまり武力によって「この地域をよこせ」ということをやってはいけないと明確に定められています．ロシアは明らかにこの国際法に違反する行為を行っています．

一方，ウクライナも戦争しているではないかと思うかもしれませんが，国際法で武力行使が禁止だといっても，相手に攻め込まれた時に反撃することを禁止してしまったら占領されてしまうので，それは例外的に認められ

ています．「ウクライナは自衛のために武力行使をしているので許容されるが，ロシアは領土を変更するために武力行使をしているから駄目だ」，これが国際法による説明になります．こういう明らかに違法の側と違法ではない側がいるので，テレビが違法ではない側に立つことはそんなにおかしなことではないということになります．

ここまで聞いて，「いろいろもったいぶって話しておいて，結局法律で決まっているというつまらない話なのか」と思われるかもしれません．ただ，国際法で武力行使を禁止するまでに，人類はかなり痛い目に遭っているわけです．帝国主義の時代には各国が武力で領土を広げていくということを行い，世界大戦が起きて，罪のない人たちがたくさん殺されました．その結果，この国際法という法律ができて，武力によって領土変更をしてはいけないというルールができたので，このルールを守るということはそんなに軽いことではないし，「何だ，法律か」と切り捨ててしまうほど甘いものではないと思います．

疑うことと信じること

ここまで私はメディア，法律，歴史についての知識を簡単に用いてお話をしてきました．また「地に平和を」というテーマを頂いて今回のような話をしようと思ってから，中途半端な知識で変なことを言ったらまずいだろうと思うので，本を調べたりして，条文などを確認して，学び直したりした部分もあります．

「テレビは中立であるべきなのに，ロシア側の主張を取り上げないのは大丈夫なのか，問題ではないのか」という疑問はすぐに湧きますけれども，この疑問に対してきちんと答えようとすると結構大変なのです．したがって，ここにある種の非対称性というか，疑問を抱くのは簡単だけれども，それに対する反論は大変だという問題があります．

社会学においては「常識を疑え」と言われますよね．あるいはメディア・コミュニケーション研究でも，メディアリテラシーという概念においては，メディアを鵜呑みにするのではなくて，「メディアを疑え」と主張されると思います．もちろんそれ自体は間違っていません．「メディアを妄信しろ」「常識を信じろ」というのはおかしな話であって，何も考えずにそれを信じるのではなく，きちんと一度自分で疑ってみることは大切です．

ただ大切なのは，疑って終わりではないということです．疑って終わりではなく，疑った後にきちんと自分で調べて，考え，学ぶことが大事だということになります．その学んだ結果として，実は常識はそんなに間違っていない，あるいは常識はこのように出来上がっていて，これはそれなりに人間を幸せにしている，社会にとって大事だということが分かるかもしれません．

あるいは，自分は「メディアの報道がおかしい」と思って疑ってみたけれども，こういう観点だったら，この報道はしなければいけないという理由が分かることもあると思うのです．その結果納得して，常識やメディアを信じるということもあり得ると思います．この信じるということは，妄信とは全然違う話なのです．もし，単に常識やメディアを鵜呑みにしているだけだったら，「テレビはロシアの立場に立った報道もしなくて良いのですか」という疑問をぶつけられた際に戸惑ってしまって，どうすればいいか分からなくなっ

てしまうかもしれません．

かつてテレビ番組の中で「なぜ人を殺してはいけないのですか」と高校生くらいの若者に問われた知識人が，何も言えなくなってしまったというエピソードがありました．この若者の問い自体も安易であったとは思いますけれども，道徳と法律の関係や殺人罪が成立された経緯をきちんと考えれば反論は可能です．あるいは，あるいは生物としての人というのは，実はそう簡単には人を殺せないようにできていて，それこそ戦争状態であっても，弾を撃ち合っているように見えて，実は人に当たらないように撃っている人が非常に多いといった知見があります．あるいは戦争に従事して人を殺さざるを得なかった人は，その後故郷に戻ったとしてもひどいトラウマに悩まされることも知られています．つまり，人という生物にとって，人を殺すというのは非常に不自然であって，非常なる苦痛を伴うことであるということを考えると，なぜ人を殺してはいけないのか分からないというよりは，人を殺すと思うことが，かなり異常な状態だということが分かるわけです．このように「なぜ人を殺してはいけないのか」という疑問に対しては，さまざまな観点から返答できると思います．

ファストフードやファストファッション，あるいはファスト映画などというものも近年話題になっていますが，「常識やメディアを疑う」といっても，それが誰でもすぐに簡単にできる「ファスト疑い」のようになってしまっては意味がないですし，社会学部で皆さんに学んで欲しいことも，そういうことではないと思います．

また，その「ファスト疑い」が社会にまん延することも決して好ましくはないでしょう．疑って終わりではなくて，疑うことの先に考えるということがあり，そして学問というものがあるのです．皆さんには「疑う」の先について考えてもらいたいと思います．

（社会学部准教授）

Ⅲ．私にとっての「チャレンジ」

2023. 7. 7 (水)

The Challenge of Seeking Advice

Vivian Bussinguer-Khavari

The way of fools seems right to them, but the wise listen to advice.
(Proverbs 12:15)

Introduction

Do you believe you are smart? Are you capable of making good decisions? When making important decisions in your life, do you do so on your own, or do you ask others for advice?

It is said that about two thirds of people believe that they are smarter than the average person around them. Of course, it is great to be confident and to believe that you are intelligent and capable of making good decisions. However, being overly confident can also be harmful because you might have a limited point-of-view and might make decisions without considering various perspectives. Therefore, being confident and smart might be a positive thing, but to act alone and to isolate yourself from others' advice is not necessarily so.

Foolishness vs. Wisdom

As the Bible says, it is not very smart not to take advice. It is foolish to do everything according to your own understanding. On the other hand, it is very wise to discuss ideas with others and to get adequate advice.

To better illustrate this, let us look at the following example. In Japan, there are various forms of natural disasters, such as earthquakes, floods, typhoons, and landslides. In every disaster, authorities evaluate the situation and formulate advisories, many times informing the public that people from certain areas are advised to evacuate to escape danger. Depending on the situation, authorities strongly advise certain people to leave everything behind and take refuge in specified safe lo-

cations. However, many people who are watching the news and listening to the government's warnings, think that they are smarter than the authorities. They want to be the ones who decide if or when the situation would become dangerous enough for them to have to evacuate or not. In their egocentric confidence, many people act alone and choose to ignore the advice they were given. Instead of evacuating, they choose to stay where they are. Initially, they think they are safe. They look out the window and see no immediate danger, but suddenly, the water level rises, the soil starts to give way, and they find themselves trapped, with no way out. It is now too late. They cannot escape. If they do get lucky, rescuers might attempt to save them, and they might survive. But other than risking their own lives, they have also put the lives of others in danger.

So, in that way, many times people are selfish, limited in their understanding, and overly confident in believing that they are smarter than others, wiser than authorities, more knowledgeable than the media, and more intelligent than those who are trying to give good advice based on perspectives and knowledge that they do not even have.

Good Decisions vs. Bad Decisions

By the way, where do good decisions come from? Well, good decisions come from experience. But then, where does experience come from? It comes from bad decisions!

If, when facing a decision, one makes a mistake, of course it is disappointing, discouraging, embarrassing, and time-consuming to overcome it. Not having reached the desired goal certainly feels like failure. The truth is, though, that mistakes might cause plenty of trouble, but mistakes, as well as bad decisions, can help people to learn, become wiser and eventually make better decisions. Mistakes lead to wisdom.

Tips for Seeking Good Advice

So far, we have seen that seeking advice is wise, but when doing so, who should you seek advice from? Who should you listen to?

Below are three points to consider when seeking advice from others.

1. Be selective.

a. Choose the right people to talk to.
b. Look for people that you admire and respect.
c. Find people who care for you.
d. Select people who have done what you want to do and succeeded.
e. Find people with experience in the area you need advice about.

2. Find someone who has your best interest in mind.
   a. Stay away from people who do not wish you well.
   b. Choose people who deeply care about you and genuinely want to see you succeed.
3. Find someone who has the courage to tell you the truth.
   a. Honest advisors can inspire growth and maturity.
   b. Seek advice from those who can honestly point out your faults and guide you in the right direction.

Types of People to Seek Advice from

Now that we know how to seek good advice, let us consider what types of people tend to be good advisors. Below is a list of three types of people we should consider receiving advice from.

1. People who are older than you
   a. The point here is not just the fact that they are older, but the fact that older people have more experience. Since experience comes from bad decisions, we can rest assured that older people have had many opportunities to fail. Therefore, their trial-and-error history has eventually led them to greater wisdom and brought them success, making them the ideal advisors to those seeking to go through what they have already gone through.
   b. The experience and knowledge of older people can help you to avoid the same errors they committed in the past.
2. People who love you
   a. Choosing an advisor who truly cares for you is crucial in assuring that the advice they give will have your best interest at heart.
3. People who have succeeded in what you plan to do
   a. There is no point in seeking advice from those who have no experience in the area you are seeking advice about.
   b. Find advisors who have succeeded in the specific area you are seeking to succeed on. They will have the best words of wisdom for you.

Questions to Ask Yourself when Seeking for the Best Advisor

1. Does this person have experience in the area I am seeking advice about?
2. Does this person care about me? Do they have my best interest at heart?
3. Will this person be honest with me? Will they tell me the truth that I need to hear?

The Challenge

Now, as this month's chapel theme is "challenge", think about the big, important upcoming decisions that you must make in your life. For example, it might be related to your future career, such as in what field to apply for jobs, or it might be about a lifestyle change such as the decision to study abroad. Whatever that big decision might be, think about the people you can ask advice from. (Remember that different decisions require different advisors.) Now, the challenge is to be humble and to seek advice with expectation. Be open to listen and be thoughtful in analyzing, evaluating, and putting into practice what you have heard. The greatest challenge is not to receive advice, but to reflect on it, and eventually make the best decision possible based on the advice you have been given.

In the end, it is your decision, not anyone else's. Therefore, you must take responsibility for it, and not blame anyone else for any unexpected or undesired outcome. The responsibility in making the decision yourself comes with the fact that if anything goes wrong, you are the one who must also face the consequences.

Conclusion

In conclusion, as the Bible says, it is foolish to make decisions alone. Being isolated from those who have great knowledge, experience, and failure/success stories to share with you is unwise. On the other hand, it is wise to talk to others and listen to advice.

May the Lord our God help each one of us to be humble in seeking advice and in desiring to grow with the help of others who care for us. Amen.

(Associate Professor, School of Sociology)

2022. 7. 12（火）

外国語へのチャレンジ

西　村　正　男

はじめに

今日は雨の中お集まりいただきまして，皆さんチャペルの活動に熱心に参加されているなと思って，非常にうれしく思っています．７月の共通テーマは「チャレンジ」ということですけれども，私は中国語の教員なのに，テーマは「ちょうせん」かと思いました．今日はここしか笑うところがないので，ここで笑ってほしいと思います（笑）．

ご紹介にあったように，もしかすると１回生の学生の皆さんや，２回生でも私のことをあまり知らない人も多いと思います．去年も今年度も，講義の担当はお休みしています．中国語を取っている人は，中国語の教科書に著者の名前があって，その中に私の名前もありますので，「この西村か」と思っていただければと思います．

『ドライブ・マイ・カー』と外国語

そういうわけで，今日は外国語についての話を少ししたいと思っていますが，まず前置きとして，別の話をします．先週，そこの図書館ホールで映画の上映会があったのを皆さんはご存じでしょうか．僕もただで見られる機会だと思って，初日の月曜日に『ドライブ・マイ・カー』という映画を見に行きました．図書館でも映画館でもいいのですが，『ドライブ・マイ・カー』を見た人はこの中にどれぐらいいますか．手を挙げてもらえますか．ああ，全然いないようですね．

カンヌ映画祭で脚本賞を受賞した，村上春樹の原作で，濱口竜介監督が監督した映画ですが，ストーリーは措くとして，私にとってすごく面白いことがありました．メインのストーリーとは別に，あの映画の中では劇中劇が演じられます．映画の中でお芝居をみんなで作り上げます．主人公は舞台の演出家で，西島秀俊が演じているのですが，その舞台がすごく面白いのです．普通に日本語で演劇を演じるのではなくて，外国の俳優たちにそれぞれ自分たちの言語で話させるという，非常に面白い仕組みになっていました．少し余計な話ですけれども，話題作をただで見られるというせっかくのチャンスだったのですが，見ていた学生は，僕も含めて二十数人だったと思います．皆さんもぜひ映画も見てほしいと思います．

その中で，台湾の女優さんが出演していて，その女優は舞台の上で中国語のせりふを話すという設定です．僕の今日の話もあまり笑うところがないと思いますが，そんなにコミカルな映画ではないので，その映画にも笑

うところがほとんどありませんでした．しかし，図書館ホールの一番前に座っていた３人組だけが「わっ」と笑って，僕も思わず微笑んだシーンがありました．それは何かというと，字幕も全然出ないのですが，舞台の上で話される中国語のせりふに，真面目なシーンなのになぜかネットスラングのような中国語が混ざっていたのです．笑った３人組の学生は，おそらく中国人留学生なのでしょう．

このように，言語が分かるか分からないかで，映画に対する反応も違ってくるというところが面白かったのですが，日本で暮らしていると，みんなが日本語を話しています．そしてこの日本という国は単一民族という幻想が強い場所でもあります．他のいろいろな言語に身を任せるということがあまり多くないわけです．そういう意味で，あの映画の中で，そういうお芝居の手法を取っていたところが，そのような単一言語の社会に揺さぶりをかけるという意味ですごく面白かったです．

一回目の留学と就職

話をテーマの「チャレンジ」につなげると，私にとってのチャレンジというと，やはり留学したことがチャレンジだったかと思います．学生の皆さんが生まれる前の話で，1995 年から 1996 年にかけて，最初に中国の天津というところに留学しました．昔，関学に着任して最初にチャペルで話した時も，留学の時の思い出のようなことを話したような気がします．そこからさらに十数年たつと記憶も曖昧ですが，やはり言葉の面もそうですが，日本と中国の違いも大きくて，生活に慣れませんでした．

その当時の中国は，インフラも含め，まだまだいろいろな面で遅れていました．インターネットというものもまだほとんどなくて，僕は日本でもやったことがありませんでした．それもあって当時は，海外にいると，情報に疎くなって社会から置いていかれるような思いなど，いろいろなことを感じていました．中国語も最初はやはり全然できないのです．大学院生の時でしたけれども，大学で一応中国文学を専攻してずっと勉強してきたはずなのですが，やはり生活の言葉などはあまり分からずに苦労した記憶があります．

そのような体験を経て日本に帰って来てから，今度は就職して大学教員になりました．最初に助手をしていた大学でも，日本語のできない中国人の先生が来たりします．その後，徳島大学に移ったのですが，その時も中国語が全くできない先生に日本に来てもらって中国語を担当してもらっていたので，そのような先生のお世話などもしないといけません．そうやって仕事で使う必要があるということもあって，中国語もかなり熟達してきたと思っています．そのように，言葉は苦労しながら身に付いていくものなのですね．

台湾での体験

あと，関学では学院留学と呼んでいますけれども，教員が半年ないし１年間，若い人は２年間行けたりもしますが，留学，海外研修の機会を頂けることになっています．私はわりと最近なのですが，2018 年度に台湾に１年間行っていました．先ほどの話ではないですけれども，日本ではみんなが日本語を話しているというイメージがあると思う

のですが，外国に行くとやはりそうではありません．ヨーロッパの国々などでも，いろいろな言語を話す人が混じっていることがよくあると思います．アメリカでもスペイン語を話す人がいたり，中国語を話す人がいたりということは普通にあると思います．

台湾も実はそうで，今日は専門の授業ではないのであまり詳しいことは言いませんが，エスニシティー，民族構成が非常に複雑なところで，同じ中国語系の言語でもいろいろな方言を話す人がいます．あるいはニューカマーで，フィリピンやインドネシアからの出稼ぎ労働者も数多くいて，そういう人たち向けの店もあったりしますが，実は言語的にも結構複雑なところで，そういうところで暮らすということもやはり新鮮な体験でした．皆さんも機会があればぜひ外国でそのような経験をしてほしいと思います．

私が面白かったことを一つ話すと，台湾にいた時にレストランに入りました．そうしたら，80 歳代か，もう少し上ぐらいのお年寄りのグループがいたのですが，何とその人たちが日本語で話しているのです．日本語教育を受けたおじいさん，おばあさんたちが，多分結構エリート層の人だったのだろうと思いますが，日本語と，いわゆる台湾語という台湾の方言とを入り混ぜながら会話をしていました．そういう世代の人がいることは知っていたし，そういう人にインタビューもしたことはあったのですが，偶然入った店でいきなりおじいさん，おばあさんたちが日本語で話しているという，これもすごく新鮮な驚きでした．

失敗から学んで成功へ

ということで，私もいろいろな失敗をしましたが，言葉はやはり失敗しながら覚えていく，それがチャレンジではないかなと思います．大学で中国語を教えているとはいっても，やはり最初は失敗を続けます．われわれ研究者は学会などで発表するわけですけれども，いつのことかはもう忘れましたけれども，やはり最初に中国語で学会発表した時はすごく緊張したと思います．やはりネイティブ・スピーカーではないので，現在でも書いたものやパワーポイントを留学生や知り合いの中国人にチェックしてもらってから発表するようにはしていますけれども，最近は，もう学会発表などでは全然緊張しないようになりました．

ただ，やはり緊張する時は緊張します．台湾にいた時に，台湾の有名なシンガー・ソングライターで映画音楽の作曲家でもある，僕と同世代の女性と知り合いました．その方がラジオ番組を持っておられたので，ラジオにぜひ出演してくれと．面白い日本人がいると思ったのでしょう．ラジオの放送局に行ってラジオ番組に出て，そのミュージシャンとトークをするというのは，やはりとても緊張しました．

僕は日本でもラジオやテレビに出演したことがないし，しかも母語ではない中国語でラジオ出演しないといけないということで，すごく緊張したのを覚えています．それも何だか好評だったらしくて，「また来てね」と言われて，結局３回出演したのですが，３回目ぐらいにはもうすっかり慣れていました．

ということで，やはり海外に出ていろいろな経験をすることがチャレンジではないかと

思いますので，皆さんもぜひ頑張ってください．２回生の皆さんがこの中にいるかどうかは分かりませんけれども，社会学部の２回生はゼミ選択があって，もうゼミがだいたい決まった頃だと思います．私はやはり学生にどんどん留学をしてほしいと思っていますが，今回私のゼミに来た学生の中にも，留学するという学生が３人いて，皆さん頑張ってくれるのだなと思っています．

もうそろそろ時間ですね．何だか自慢話のようになってしまいましたが，ただ私にも弱点がありまして，英語が駄目なのです．打樋先生などはイギリスに留学されて英語が達者だと思いますし，宣教師のベネディクト先生も，日本語でしか話したことがありませんが，おそらく英語が達者だと思います．しかし私は英語が駄目です．ところが，やはり研究していると英語でも発表しろと言われることがあります．僕は英語が苦手だから嫌だと言ったのですが，「お金はあるので，あなたの原稿を全部英語に翻訳してもらう．それを読み上げるだけでいいから発表しろ」と言われてやったのですが，それでも緊張します．

英語を普段勉強していないと，まず単語のアクセントが分かりません．アクセントだけを必死に調べて，半年ぐらい前のまだコロナウイルスが盛んだった時期にオンラインで発表したのですが，なんとかやり終えました．ただミュートにするのを忘れていて，発表が終わった後に「はあ」とつぶやいてしまったのがみんなに聞こえてしまって，大失敗したという思い出があります．ということで，皆さんもぜひ海外にも足を運んで，いろいろな失敗をしながらチャレンジをしてほしいと思います．

（社会学部教授）

2022. 7. 13（水）

新しい学び

石　田　　惇

はじめに

社会学部で担当しているのは数理社会学や基礎数学という科目なので，もしかしたらなかなか皆さんとお話しする機会がない，いわゆる「レアキャラ」の教員かもしれませんが，どうぞよろしくお願いします．私がチャペルで話をさせていただくのはだいぶ久しぶりで，前が多分 2018 年だったので，コロナ前ですね．そこからいろいろなことがあって，チャペルも少し短くなったりしましたが，幸いこのような形で，またきちんと対面でチャペルができるようになったことは非常に喜ばしく，うれしく思います．

与えられたテーマが「私にとっての『チャレンジ』」ということで，何の話をしようかと少し考えていたのですが，あまり思い付かなくて，子供の時に進研ゼミをやっていたという話が一番チャレンジに近いかなと（笑）．ただそれだと 10 分持たないのでどうしようかと思っていました．

コロナ禍での新しいチャレンジ

皆さんも体験したとおりコロナ禍がありました．今も感染者数が上昇しており，今後のどうなるかという不確実性が依然として高いですが，だいぶ通常の生活に戻ってきたと思います．しかし，特に 2020 年の最初のコロナの頃は，かなり外出規制などがあって，なかなか外に出ていろいろな活動ができない，人に会えないということが長く続いて，それが例えばお年寄りの人の心の健康などにすごく影響があったということが言われています．あるいは皆さんも学生として体験されたかもしれませんが，家の中でオンライン授業ばかりで心が沈むということがあったかと思います．

そういうこともあったので，多分コロナの一番大変だった時期に新しいチャレンジをするのは少し難しかったと想像します．私自身もその時期に何か新しいことを始めただろうかと考えてみると，特になにかを始めた記憶もなく，ただ必死に毎日オンライン授業など新しいことに対応していろいろやっていたという覚えがあります．ただ，自分に近い学生さんなどと話をしていると，コロナの中であっても何か新しいことを始めてみたという話がいろいろあって，そういうことを聞くと「なるほど，そういうやり方もあるんだな」と感心した記憶があります．

例えば，ずっと家にいるので時間がもったいないから筋トレを始めましたという学生がいました．言われてみると確かに少し筋肉が

付いている．あるいはオンラインで新しい勉強を，例えばプログラミングの講習を始めましたというような学生がいました．その学生さんはそれを生かして就職をするという話になって，それはそれで良かったなと思います．あるいはコロナが少し落ち着いてからになりますが，心機一転新しいスポーツを始めたという話を聞いて，「なるほど，それはいいな」と思っていました．

中国語を習う

私自身のチャレンジという話でいうと，私は来年度，非常に幸いなことに研究休暇，留学の機会を頂きました．関学には非常に素晴らしいことにサバティカルの制度が名目上，きちんとあります．サバティカルはまさに安息年ということで，６年間働いて１年間休むという，宗教的なところに端を発していると思うのですが，関学でも６年頑張って仕事をすれば７年目以降に留学等の機会を頂けるということで，非常に幸いなことに来年頂くことになりました．

どこに行こうかと考えたのですが，これも非常に幸いなことに，いろいろな偶然が重なって，私の妻が実は関学出身で今は別の大学に勤めているのですが，同じ年に留学の機会を得るということになったので，これは家族一緒に行けるということになりました．ではどこに行こうか．コロナもまだ見通せないということもありますし，妻は台湾出身で，台湾を研究の対象にしているということもあるので，それなら台湾に１年住むのもいいねということで，台湾に行こうと決めました．

先ほどご紹介いただいたように，私自身は数理社会学や統計，数学が専門なので，基本的に紙と鉛筆とちょっとしたパソコンがあればどこでも研究ができます．だからずっと日本にいても別にいいですし，どこにいてもいいという，ある意味フットワークが軽い専門分野です．フィールド先があってどこかに行かなければならないということはないので，台湾で数理社会学をやるのもいいのですが，せっかくなので台湾の社会や文化の研究も始めたいと思いました．

これまでも妻の里帰り等に付いていって台湾で過ごすことがいろいろあって，言葉も片言ぐらいだったら話せるし，分かるし，特にレストランで料理を注文することは自信があります．もちろん体系的に勉強したことがないので，少し難しい話になると全然分かりません．せっかくなので中国語を，いわゆる台湾でいう国語，北京語ですけれども，これを少し勉強しようと思い立ちまして，今は週に１回語学のスクールに通っています．きちんと自分のポケットマネーからお金を出して行っています．そこでは，最近は台湾華語という言い方をするのですが，台湾で現地化した北京語を教えてくれるということで，勉強を始めました．

どこから勉強を始めるかというと，中国語の授業を取られている方は分かると思いますが，本当に最初の，ピンインの読み方やボポモフォの発音の仕方など，音読の基本のところからです．多分現地の小学生が習うようなことを最初に勉強して，少しずつ難しい表現を習っていくのですが，そうやって新しい言語の勉強を始めると，やはりそれ自体が非常に楽しいのです．初期の頃なので，学習曲線という言い方がありますけれども，やはり上達するというか，いろいろなことが聞き取れるようになるという実感がすごく湧くので

す．ですので，非常に楽しく，久しぶりに自分の研究や専門とは少し離れたところの初歩的な勉強をすることで，学ぶことそのものの楽しさに改めて気付きました．

あと気付いたのは，ポケットマネーで行っているので，お金がかかるということです．それなりのお金がかかるので，やはり教育にはお金がかかるということに気付きました．1 時間幾らというように，かなりシビアにお金が決まっています．例えば大学だと学費払いきりで，保証人さんが払われるケースが多いと思うので，お金がかかっているという実感がなかなかないかもしれませんけれども，やはり無償ではありません．だから勉強できる機会を得られるというのは非常にありがたいことだということに気付きました．

もう一つは，私は先生と対面の一対一でやってもらっているのですが，私よりも一回りぐらい若い先生です．その先生が，私が「ポー，ポー」などと言うと，「ヘンハオ，ヘンハオ，素晴らしいです！」などと言って，すごく褒めてくれるのです．それが結構うれしいのです．褒められるとうれしいということ．これも当たり前かもしれませんが，何だかマイナス点ばかりを言われると，それこそ学ぶ気をなくすではないですか．だからやはり褒めるという要素も，これは学ぶというより，教える時に重要なのだなということに気付かされました．

私自身もぜひ授業やゼミで学生をもっと褒めて育てようと，そう思うようになりました．だから授業中などに「素晴らしい！　きちんと授業に来られましたね」「寝ないできちんと聞いている，偉い！」みたいな感じで．何でも肯定するコウテイペンギンですね（笑）．やはりそういうことが重要かなと，私自身も勉強していろいろと気付かされました．

先ほども言ったように，学生の皆さんは幸いにもオールインクルーシブの大学におられるので，普段の授業やゼミではないいろいろな学びの機会が，それこそあちこちに転がっていると思います．ぜひ積極的に，ちょっとした新しい学びにチャレンジされたらいいのではないかと思いますので，ぜひ数学や数理社会学の授業を取ってください．取らなくても，私に会いに来てくれたら「来てくれて偉い！」と喜んで褒めたいと思います．

（社会学部教授）

2022. 7. 20（水）

私の大学生活

貴 戸 理 恵

はじめに

今日は「私にとっての『チャレンジ』」というタイトルを頂きましたので，チャレンジなどという大層なものではないかもしれませんが，私が大学生だった時に，人生を変えようといろいろな行動を起こしていた話を皆さんとシェアさせていただきたいと思います．

私は大学は慶應大学というところに通っていました．皆さんは慶應というと，慶應ボーイや，ミスコンが派手だったり，華やかな世界を思い浮かべる方もいらっしゃるかもしれませんけれども，私が通っていたのは SFC と呼ばれる湘南藤沢キャンパスというところでした．

総合政策学部の出身なのですが，それは日吉や三田などのメインキャンパスからはずっと離れた湘南台というところにあります．湘南というと海のイメージですが，「台」が付くので山だったのです．山の奥のキャンパスで，こういう雨上がりの時期には家畜の臭いがふっと漂ってくるという，そういう中で大学生活を送っていました．駅からバスで延々 20 分ぐらい行った山の中にキャンパスがあるのですが，その駅前にも和民とオリーブの木，それからバーミヤンぐらいしかなくて，しかも 4 年間キャンパスが変わらないのです．

そういう中で，2 年間その大学に通っていると，いろいろと飽きてくるわけです．個々の授業の中には面白いものもあるけれども，何だかいまいちぴんとこな．大学生活がどのようなものかも大体つかめてきたし，私はこのまま 3 年生，4 年生とこういう暮らしを続けていくのだろうかと，何か不全感のようなものを漠然と持っていたのです．もっと世界を広げたい，もっと夢中になれる何かがあるのではないかと思っていました．

試行錯誤した 2 年生時

それで，いろいろな行動を起こしていたのが 2 年生の時です．2 年の夏にアメリカの大学に短期留学に行きました．大学が募集していたので，応募して行ったのです．アメリカのスタンフォード大学のキャンパスで 1 カ月半ぐらい過ごしました．ちょうど〓Taiwan National University〓の学生さんも来ていて，現地の学生さんとみんなで大変仲良くなりました．

印象に残っている授業としては，当時は 90 年代の後半で，日本ではセクシュアルマイノリティー研究がようやくスタートしたぐらいでしたが，私が取った授業の中には，レ

ズビアンの女性の教授が自分のセクシュアリティーを学生に対して公開しながら授業をやるというスタイルの授業があり，すごく面白いと思いました．

帰ってきてから，何かもっとないだろうかということで，ミーハーだった私は「三田に行きたい！」と思いました．慶應は，他の学部の人たちは大体 1〜2 年を日吉で過ごして，それから三田（みた）に移っていくのですが，SFC というのは，関学でいうと，ずっと三田（さんだ）キャンパスで 4 年間過ごしている人が「上ケ原に通ってみたい」と思う気持ちと少し似ているかと思います．当時，三田にメディア・コミュニケーション研究所（通称メディアコム）という研究所がありました．そこでは現役のテレビ局のプロデューサーやアナウンサーのような人が講師として外部からやってきて授業をしてくれるわけです．

私は当時，何を血迷ったかアナウンサーになりたいと考えていまして，メディアコムに行ってみようと思って，選抜試験のようなものを受けてそこに入ったのです．でも，入ってみて気付いたのは，「自分はテレビを見ない人間だった」ということでした（笑．他の学生たちはすごく熱心に現役のアナウンサーの授業などを聞いているのですが，私は一つも興味が持てなかったのです．「これは違う」と思ってすぐにやめて，SFC に戻りました．

フェミニズムとの出会い

そんな頃，ゼミでフェミニズムの授業を受けました．そのゼミの中で配られた文献に，上野千鶴子さんという有名なフェミニストの方がいますけれども，その方と花崎皋平さんという，哲学者で社会運動家の方の対談が含まれていました．それは「マイノリティの思想としてのフェミニズム」というタイトルだったのですが，当時私はその文献を読んで，非常に揺すぶられました．

私はそれまで，フェミニズムというのは女性の権利を主張するものだと思っていました．男性のほうが社会の中で優遇されているのは正しくないので，女性にも同等の権利をよこせと主張するのがフェミニズムだと思っていました．でも，そうではないのだということがそこでは書かれていたのです．上野さんは，フェミニズムというのはマイノリティーの思想であるし，そうあり続けるべきだと言っていました．つまり，男も女も半分ずついるのだから同等の権利を持つべきだ，現状の社会のなかで男性並みの権利を女性も持つことがゴールだ，ということではなくて，マジョリティ中心に作られている現状の社会を批判的に問い直す視点が大事なのだ，と言っていたわけです．

そのように位置付けることで，「普通」とされたものから外れた人々として，女性が他のマイノリティーと連帯していくことができるようになります．例えば障害を持っている人など，弱さを抱えた人と連帯し得るような思想としてフェミニズムを打ち出していました．「女性だってできるんだ」と言っていくのではなくて，「普通とは一体何だろう」「『できる』とは一体どういうことだろう」というように，社会の中の当たり前を問い直して，多様な価値に開いていくこと，それがフェミニズムなのだと語られていました．

そしてそれは返す刀で――上野さんは「返す刀で」という表現をすごくよく使われますが――返す刀でマジョリティーに向かって，

「私はたった一人のマイノリティーかもしれないけれども，あなた方は私がその場にいることで，99 というマイノリティーにしか過ぎなくなるのだ」ということを主張していく，その起点にフェミニズムという思想はなるのだということを言っていたのです．私はすごくそれに揺すぶられました．

そして私はこの人に会いたいと強く思ったのです．それでお手紙を書きまして，当時の指導教員が上野さんの知り合いだということでつないでもらって，お時間をつくっていただきました．大学の 3 年生になったばかりの春でした．上野千鶴子に会いに，当時東大で教鞭（きょうべん）を執っておられたのですけれども，本郷三丁目駅まで会いに行きました．当時，上野さんは法文 2 号館という古い建物の最上階に研究室を持っていて，そのドアの前にはフェミニズム系の映画のポスターや，シンポジウムのポスターなどが貼ってありました．そのドアをコンコンとたたいて，向こう見ずに，怖いもの知らずに入っていって「お手紙をお渡しした貴戸です」と言ったのです．

忙しいなか見ず知らずの学生のために，時間を取ってくださったことには今も感謝しています．自分の思いを訴えると，「私はあなたに何をしてあげたらいいのですか」と聞いてこられました．私は「会いたいからお時間をつくってください」とお願いして会いに行ったので，もう目標は達成していたのですが，どうしようかと思って，「ゼミに入れてください」とその場でお願いしました．学部の上野ゼミはフィールドワークのゼミだったのですが，「いいよ」と言っていただきまして，「でもテーマを持っている人でないとここのゼミには入れません」と言われたので，「テーマはあります」と，本当にその場で考えたような，「横浜市の保育行政についてフィールドワークをやりたいです」のようなことを言って，ゼミに入れていただきました．

当時，上野ゼミは 6〜7 人ぐらいしかいなかったのですが，そこに外部生として入れていただいて，東大生に混じって 2 年間，一緒に卒論を書きました．そこでフィールドワークのやり方と，マイノリティーとしてこの社会を見るという，そういう見方をたたき込まれたということが，今の私が書くものや授業の組み立て方の根本を規定しているということがあります．

私はその時，そのゼミに夢中になってしまい，本当にうそのように，来週のゼミが待ち遠しくてたまりませんでした．「今日は何を学んでやろうか」という感じで行くのです．午前中のゼミだったのですが，1 時間ぐらい前に着いてしまって，本郷のスタバで時間をつぶしたりということをしていました．時間ぴったりに行ったら私と先生しかいなくて，他のゼミ生はみんな遅刻しているということもありました．

お伝えしたい二つのこと

その時に，全力で取り組む楽しさ，それから認められる喜び，何より世界が広がっていくような感じ，道がすっと一歩見えるような感じを本当に味わうことができて，その鮮烈な感覚を今もよく覚えています．何か迷った時に，あの時の感覚に立ち戻るというような，そういう自分の道の正し方を今もしているような気がします．

皆さんも大学生として生活される中で「このままでいいのかな」と，まだ自分の人生を

これによってつくっていくというような，いちばん大事な何かに出合っていないという感覚を思っているかもしれません．私がお伝えしたいと思うのは 2 つのことです．一つは，出合うべき重要な何かというのはどこにあるか分からないので，いろいろなドアの前に立ってみるといいと思うのです．ドアの前に立ってコンコンとノックをしてみると，向こうからそのドアが開く時もあるし，開かない時もあると思います．そして開いたと思って中に入ってみると，何か全然違うものが見えるということもあると思います．でも，あるドアをノックして，それが開いた時に一歩道が見えるというようなことが，もしかしたらあるかもしれません．それが出合いになるのかなと思ったりするのです．

もう一つは，もし皆さんが論文を読んで感動したり，何か本を読んで「この著者に会いたい」と思ったら，どんどん連絡を取って会いに行ったらいいのではないかと思っています．今は私が若い頃よりもだいぶ連絡を取りやすいですから，著者に会いに行ったらいいと思うのです．迷惑かもしれないと思う必要はないと思います．どうせ多かれ少なかれ迷惑なのです．相手が本当に迷惑だと思ったら断るだけですから，誰も傷つかないと思います．ですので，やってみればいいです．そして，偉い人や有名な人であればあるほど，訪ねてくる相手が有名か，お金があるかということでは動きません．若い人の熱意というものがそういう人たちを動かすということがあるのだろうと思います．というわけで，皆さんもぜひチャレンジをしていっていただきたいと思います．ありがとうございました．

（社会学部准教授）

Ⅳ．みんなで生きる

2022. 10. 12（水）

グローバル化時代に必要な素養

――「マタイの福音」と現代ムスリムを通じて――

安　達　智　史

> 人を裁くな．あなたがたも裁かれないようにするためである．あなたがたは，自分の裁く裁きで裁かれ，自分の量る秤で量り与えられる．あなたは，兄弟の目にあるおが屑は見えるのに，なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか．兄弟に向かって，『あなたの目からおが屑を取らせてください』と，どうして言えようか．自分の目に丸太があるではないか．偽善者よ，まず自分の目から丸太を取り除け．そうすれば，はっきり見えるようになって，兄弟の目からおが屑を取り除くことができる．（マタイによる福音書　7 章 1-5 節）

はじめに――「汝裁くなかれ」

本年度から社会学部に着任しました，安達智史と申します．本日は，「みんなで生きる」というお題が与えられていますので，私なりにそのテーマについて話をさせていただきます．

本校はキリスト教の大学ですが，おそらく多くの学生および教員の皆さんと同様に，私はキリスト教者ではありません．ただ，同じ「啓典の民」である現代のムスリム（イスラーム教徒）の若者の研究をしている縁もありますので，チャペルアワーの時間を借りて，私の研究について紹介させていただきます．

その導入として，私と（新約）聖書の関わりについてお話します．私が聖書に初めて触れたのは大学 3 年生，つまり皆さんと同じくらいの年齢だったと記憶しています．友人に誘われて，京都駅近くの教会の牧師が主催していた「聖書を読む会」に参加したことがきっかけでした．そこで，聖書のいくつかの章句を読みましたが，なかでも妙に「心に響いた」箇所がありました．それが，「マタイの福音」第 7 章です．

その冒頭では，次のように述べられています．

> 汝裁くなかれ．汝裁かれないためである．汝裁くその裁きで汝裁かれ，汝量るその量りで汝量られるであろう．なぜ兄弟の目にある塵が見えるのに，汝の目にある梁に気づかないのか．

ちなみに，梁とは「丸太」を意味しています．丸太が目に刺さっているというのは，想像するだけで，シュールで面白いではありませんか．この箇所では，他者の信仰に対する judgement（判断／批判）をめぐる問題が

論じられています．「汝裁くなかれ，汝裁かれないためである」，と．この節が，キリスト教においてどのような意義をもつのかはわかりませんでしたが，私は当時からこの節を妙に気に入っていました．

judgement への批判――イギリスの移民第二世代ムスリム

さて，それから約 10 年後，私はイギリスの移民第二世代ムスリムの調査を始めましたが，その際，「マタイの福音」のこの箇所を想起させるような経験をしました．というのも，インタビューのなかでムスリムの若者たちが，「judge/judgement」という言葉を，とりわけ否定的な意味において頻繁に用いていたのです．その言葉は，主に二つの文脈において語られていました．

一つが，西洋社会においてムスリムであることに対する judgement です．彼女／彼らは，西洋というキリスト教文化ないし世俗化した社会において，マイノリティという地位にあります．とりわけ，9/11（アメリカ同時多発テロ），7/7（ロンドン同時爆破テロ），ムハンマド風刺画問題，シャルリ・エブド襲撃事件，過激派組織（ex. タリバーン，ISIL）によるアフガニスタンやシリアの統治を背景に，ムスリムは近代の民主主義的価値に反する危険な集団とみなされ，数多くの差別を経験しています．

その原因の一端が，宗教規範に基づく服装規定にあります（ただし，何が正当な宗教的規定かは解釈によりますが）．たとえば，ヨーロッパ社会で，ムスリム女性のヒジャブ（ex. スカーフ，ヴェール）はしばしば論争を巻き起こしています．ヨーロッパの文化空間でヒジャブを着用する女性は，信仰を優先し，より広い社会への統合の意志を欠いていると（勝手に）judge されるわけです．イスラームにおいてヒジャブの着用は，女性の「慎み深さ」を表すものであり，具体的には性的部分を家族外の他者にみせたり，不特定の異性との交わりを避けることを目的とした一種の倫理規定です．それは，社会への適応や参加を必ずしも拒否する行為ではないにもかかわらず，彼女たちはそのように judge されるわけです．彼女／彼らは，そうした社会の judgement に異議を唱えているのです．

もう一つの文脈が，自身のエスニック・コミュニティにおける信仰をめぐる judgement です．私が調査した移民第二世代の若者は，自身が暮らすコミュニティ，とりわけ年配者からの信仰をめぐる judgement に対して抗議の言葉を述べていました．とくに女性は，ヒジャブを着用しないとき，周りから否定的にとらえられることに不満をもっていました．その理由は二つあります．第一に，ヒジャブの着用は，神が求める慎み深さの「表れ」に過ぎず，その行為自体が重要では無いと考えるからです．「表紙によって，その本の内容を判断できない」という言葉があるように，ヒジャブの着用によってその人物の信仰を判断できないわけです．第二の理由が，信仰をめぐる judgement は神の管轄権であり，人間がおこなうべきではないと考えるためです．人間は，外面（ex. ヒジャブ着用の有無）しか観察できないのに対して，神はその内面（＝信仰の有無）を深く洞察することができる．そのため，外面によって人の信仰を judge してはならない――汝裁くなかれ！――というわけです．

グローバル化時代に必要な素養――マイノリティであることと judgement の抑制

さて，judgement に対するこうした抑制的な態度は，単に宗教的な要請であるというだけではなく，グローバル化する多文化社会における平和裡な関係構築を考える上で重要なヒントを与えるものです．グローバル化社会では，見た目や習慣の異なる人たちの交わりが当たり前になっています．そうしたなか，表面上の違いを殊更とりあげ，批判したり，排除したりすることは望ましくも，合理的なことでもありません．

この点は，グローバル化社会を前提に生きる若い皆さんに，とりわけ当てはまります．グローバル化とは，国境を超えた移動が当たり前になる社会ですが，より厳密には，移動なしにライフ・チャンスの向上が困難な社会を指します．空間的モビリティが社会的モビリティと関連することから，移動（ex. 留学，海外赴任）が個人の人生にとって重要な契機となるわけです．逆に一つの場所に留まることは，そうしたライフ・チャンス（ex. キャリア・アップ，能力開発，昇進）を逸するリスクをともなうわけです．

移動が価値をもつ社会で生きるということは，ある個人は，人生全体，あるいはその一時期において，移動先でマイノリティになることを意味しています．人々は，――イギリスにおけるムスリムのように――移動先で異なる見た目や習慣をもつ「異邦人」となり，ホスト社会の人々から観察・評価され，場合によっては否定的に judge される危険にさらされます．こうした事態を考えるならば，私たちもまた，多様な背景をもつ人々への安易な judgement を避けるべきだという点を理解することができるでしょう．

おわりに――現代において宗教的テクストを読むこと

繰り返しになりますが，いま述べた点が「マタイの福音」の含意であるのかは，キリスト教者ではない私にはわかりません．ただ，私はこの章句が好きで，そうした態度を持ちたいと考えているわけです．みなさんも，『聖書』を手にとって読んでみてください．イスラームの教典である『クルアーン』でもよいです．その際，信仰の有無といったことをあまり気にせず，パラパラ頁をめくり，心に響く／ひっかかる箇所をみつけてください．そのなかには，自分の人生を導くような，あるいは自身の道を照らし出すような，そういった文章があるかもしれません．また，そのときはピンとこなくとも，将来，その（自分なりの）意味がみつかるかもしれません．

その上で，キリスト教あるいはその他の宗教に興味をもたれたならば，それを学術的に探求してみてください．本学は，それを可能にする環境が整っています．宗教的テクストを学ぶことは，単にその宗教を深く知るだけでなく，多様化する現代社会のなかで「よりよく生きる」ヒントを得るきっかけになるものかもしれません．本日の内容が，そうした宗教的テクストと現代社会との関わりについての理解の入り口となったのであれば幸いです．

（社会学部教授）

2022. 10. 19（水）

一人で死ぬとみんなで生きる

金　菱　　清

なぜイエスは財布を持たなかったのか？

当初，このお題をもらったときに，なぜイエスは財布を持たなかったのかということでお話をしようと思っていました．現在のようなスマホ決済なら持たないこともありなのですが，文献をみるとイエスは財布を持っているという記録が聖書にはないのです．いわゆるホームレスみたいな存在で，弟子たちや周りの人がお金をだしていたのですが，これはこれでイエスは一人で生きているのではなくみんなで生きるという証にもなっています．

ちなみに税金でさえも財布を開くことなく，奇跡を起こしてお金（＝銅貨）を手に入れているほどの徹底ぶりでした．食事については，罪人と言われた，当時の社会からのけ者にされていた人々の家に招かれてご馳走になったり，ある時は人の結婚式に出席をして大酒を飲みながらどんちゃん騒ぎをしている様子をみることができます．

伝道のために弟子を派遣する場面では，「財布を持っていくな，食事はご馳走になれ」と命令をしています．なぜこのようなまでに金銭を使おうとしなかったのか，今日はそれには直接答えずにみなさんの課題にしておきたいと思います．

一人で死ぬ

今日はもっとみなさんに伝えなければならないことがあるような気がしていています．「みんなで生きる」ということは，反対は一人で生きない，つまり死ぬ　ということになります．みなさんは死を考えたことがあるでしょうか．

実は死はみなさんの丁度 20 歳前後によく考えられると言われています．死に近い高齢者はまわりの人が亡くなっていくので身近すぎますが，逆にみなさんの年代ですと遠すぎて死を極端に純粋に考えがちです．ですが，そのことは家族にも言わないし，ましてや身近な友達にも恥ずかしくて言わないわけです．したがって，一人で抱え込んでしまうのです．

私自身もみなさんの頃が割と死が怖くいてもたってもいられない経験があります．自分の存在がなくなるかもしれないのに，どうして隣にいる人や家族はこうやって平気で何食わぬ顔で生きているのかと不安になったこともあったことは正直に話しておく必要があるでしょう．

しかし，それだけでなく，なぜ私が今日このことをお話しようかと思っているかといいますと，前任校で私のゼミ生の男の子が 4

年生の時に自死を遂げました．ある日学科長に呼ばれて，○○君が亡くなりましたということを言われました．初め交通事故かなにかでなくなったのかと思ったのですが，自ら命を絶ったということでした．腰が抜けるということはこういうことかと思いましたが，力が入りませんでした．友人もゼミ生も親御さんも私にも，一切サインも出さないまま彼は亡くなりました．誰からも愛されるキャラで，何かで悩んでいたとは聞いていませんでしたし，ごくごくみなさんのまわりにいる子となんらかわりはありません．もちろん冗談でまわりには，死にたいなどと言ってましたが，明るく気遣いができ，人とのコミュニケーションもでき，とくにこれといって思い悩むようなことは見当たりませんでした．近しい友人に聞いても特に思い当たるようなことはありませんでした．ただ就職活動期間中でちょうどあまり話さない時期にはいっていました．

つまり客観的な自死に至る痕跡を見つけることができなかったのです．Twitter 上では高校生の頃から自身のことを「コミュ障」として女性と話すのも緊張するわーとかは書いていました．しかし，私の眼からみても，友人やゼミ生の眼からみてもコミュ障なんかではなく，友達付き合いもうまくいっていました．

惰性で生きる

しかし，私は死生学の講義で出した彼のレポートを改めて見直してみました．恐ろしいことに，彼は「死ぬということについて全く怖くはない．」と答えていました．その理由も綴られていて，「惰性で生きているから．死んだらそれが運命だったんだなって諦めがつくし，生きて何かやり遂げたいという野望とかもあんまりないから．痛いのは嫌だけど，死ねば色々楽になるから．」ということでした．生きる意味についても，ほとんど消極的な意味しかないとし，「生まれてきたかったというわけでもないし，誰かに産んでくれとも頼んだ覚えもない．親のエゴで生まれ，子は幸せになるだろうと勘違いし，人生というギャンブルに勝手に出されたから．生きることは惰性である」というものでした．

惰性という言葉は，力を加えてその力が減退した先が着地点となります．つまり生の終着点となりました．特に遺書らしいものもなく，お気に入りのコンサートの予約も友達と亡くなった数週間先にとっていました．

恐ろしいことに，彼は死ぬことについてまるで私たちが，朝，顔を洗うがごとく，まるで定期試験を受けるがごとく，たんたんと亡くなっていきました．

親御さんに後から聞くと，亡くなった当時はアパートの部屋も服も普段となんら変わらず，そのままであったそうです．アップダウンのある躁鬱とは異なり，その場合ああ落ち込んでいるなとかハイな気持ちだなということで見つけやすい．しかし，ずっと沈み込んだままの恒常的な鬱は，ある種諦めという諦観の中にいて周りのものにも気づかれず，ひょっとすると本人ですらわからなかったのかもしれません．その意味では若干 20 歳にして達観していたのです．

生きている意味について

亡くなってから，彼にこう問われているようでした．それは生きていて何の意味がある

のか．この根源的な問いかけに対して，自ら死ぬことについては即座にそうではないと否定できるのですが，果たしてこの問いかけ，生きることの意味に対して真正面から逃げずに答えること，また彼を説得させることは残念ながら今の自分にはできません．みなさんならどうでしょうか．たとえ彼の亡くなる 1 週間前に戻ったとしてもおそらく同じ結果になっていたと思います．

丁度彼と同学年の学生が起こした警官殺傷事件がありました．これも謎でした．何かに逆恨みがあるわけでもなく，突然警官に発砲したのです．他人を傷つける他傷・自分を傷つける自傷を問わず，それはまるでロシアンルーレットのように私たちの目の前に姿を現すことがあることを否が応なしに知りました．彼のお墓参りに行かせていただいたときに，お母様が若いからか喉仏の骨が大きいために，骨壺にひっかかっていたことを聞かされました．彼の意思とは反対に生物的には生きようとしていたのではないかと思います．

死生学の別のアンケートで，生まれ変わるならば何になりたいと問いに対して，彼は神という選択肢をし，その理由として，「神になって世の中の常識とか概念を全て壊したい．幸せな人と不幸せな人とを上手くバランスをとってあげたい」からとありました．考えてみますと彼の生きた時代，我々の生きている時代は，官僚が不正に働いて子息を大学に入学させたり，医学部では女性を入らせない操作が行われていたり，ブラック企業にブラックバイト，非正規労働の搾取など，普通の人びとや正しく生きようとするものが正しく生きられる社会では必ずしもなかったのかもしれません．

彼を通して学べることは，彼は結局のところ自分自身という主人公になれなかったということだと思います．これは難しくて，社会学のデュルケーム流に言えば，「自分自身を目標にして生きることはできない」ということに合致するのかもしれません．

自分の「主人」になる

しかしながら，かすかにでも生きる光があるとするならば，皆さんには関学のスクールモットでもある，Mastery for Service を思い出してほしいと思うのです．一般的には「奉仕のための練達」と訳され，隣人・社会・世界に仕えるため，自らを鍛えるという関学人のあり方を示しています．普通マスタリーを使う時は，mastery of English という形で英語に習熟している，つまり使い来なしているという意味になります．つまりこれを意訳すれば，マスター＝主人になると言えます．自分自身を使いこなせて習熟している人がマスターです．主人の反対は奴隷になります．

奴隷は常に自分に対して受け身な姿勢や態度でいます．その意味で亡くなった彼がずっと自分自身の奴隷だったのだと思います．自分を使いこなせず，惰性としてしか生きられなかったのだと思います．その結果死を奴隷からの解放だと位置づけたのかもしれません．自由は死んでから得るものではなく，生きているうちにしか自由になれないと思うのです．

関学のベーツ氏の言葉に「Self-Master＝自主」という言葉があります．精神的な奴隷から解き放たれる自己の必要性を訴えかけたものだという理解を私は勝手にしています．

つまり，一人で死ぬという理解から遠回り

して，今日の「みんなで生きる」に繋げるとすると，自分を押し殺してみんなのためという意味ではなく，このセルフマスターという自主という自分の習熟の上にしかみんなで生きるということが成り立たないのではないかとことを示して今日の言葉としたいと思います．ご清聴ありがとうございました．

（社会学部教授）

2022. 10. 25（火）

「みんな」の内と外

今 井 信 雄

「みんな」と「ペット」

今年，社会学部の副学部長をしている今井と申します．今日は皆さんに「みんなで生きる」というタイトルでお話しさせていただくことになりました．それでいろいろなことを考えまして，何をしゃべろうかと思っているのですが，今日の話は，「みんなで生きる」といった時の「みんな」というのがどのメンバーなのか，自分で思う「みんな」とはどのような「みんな」なのかという話として受け取ってもらえたらいいかと思います．

私たちは社会学部ですね．私も社会学部の教員で，社会学を専攻しています．日本社会学会という学会があります．それは日本の社会学の研究者の中で一番多い，大きな学会なのですけれども，そこで昨年度から立ち上がった，少し新しくて面白いなと思ったある部会があります．

それは猫社会学という部会で，自分たちの社会の中で，猫とどのように関わっていくのかということを研究することをやっている人が集まっています．猫がブームになっていたり，動物やペットがブームだという話がありますけれども，猫単体で，猫社会学という部会ができたのです．少しだけびっくりして，面白いなと思ったのですが，今年も部会の２回目ができました．ということは，多分それなりに広がりがある分野なのだろうと思います．

これは社会学的な考え方でも捉えられるし，私たちが「みんな」ということを考える時に，どこまで自分のメンバーとしてみんなのメンバーシップを与えるかということとしても考えられるのだろうと思ったのです．つまり猫のことが好きな人はたくさんいますけれども，その人たちは自分の大事な「みんな」の範囲に猫を入れているわけです．

社会学の研究の中で，昔，関学の社会学部にもいらっしゃった大村英昭先生という先生がいらっしゃって，もうお亡くなりになったのですが，日本を代表する社会学者の一人です．その先生が 10 年以上前に，動物と人との関係の中で，ペットロスということを先駆けて研究テーマにしたことがあります．

ただその時は，自分の家族としてのペットが亡くなった時に，家族として悲しいという，動物だけれども自分の家族のようにしているということがそこでのテーマだったのですが，今の猫などの動物を巡るいろいろな状況を見ると，自分の家族でもないのに，猫や動物をすごく大事にするということがあります．それは家族を超えた広がりの，その「みんな」の範囲が広がっていて，そういうみん

なで生きる社会の広がりがあるのかなと考えられます．

ただその一方，そこでの愛情を持った接せられ方を見ると，動物の行動が擬人化されていると．人のように捉えて動物が，例えば猫がこのように動いている，寝転んでいる時に，人が何か，例えばせりふを当てはめるなど，そういう，インスタやユーチューブなどに上がっているところで，みんなが見て楽しむというか，そこで自分たちの成員というか，メンバーシップ，優しい対象にするというのは，その時の対象は，人のように扱っているということなのです．

でも人のように解釈できない，擬人化できない動物はそこには入っていません．つまり同じ動物であったとしても「みんな」の中に入る動物と「みんな」の中に入らない動物という，その境界があるのではないかと，このお題で考えた時に少し思ったのです．そのように擬人化されるかどうかということをどうやって私たちがやっているのかということも，社会学の考え方でいろいろと捉えられています．

「みんな」と「観察者化」

私は文化社会学という領域に一応入っていますけれども，学生がゼミで文化社会学のことでテーマで卒論を書きたいという時に，2〜3年に1人か，毎年1人ぐらい，アイドルのことについて書きたいという学生がいます．そのアイドル研究のこれまでの蓄積の中に，観察者化という考え方があります．それは，アイドルというのは昔は疑似恋愛の対象で，疑似の，空想の恋人であると．その対象として楽しんだり，愛情を注ぐ対象だったのが，それが今や，例えば，昔は1人のアイドルが当たり前だったのですが，今はほとんどいなくて，グループですよね．グループ同士でいろいろなコミュニケーションを取っているのを観察して，それぞれの関係を楽しんでいます．

だから疑似恋愛の対象ではなくて，2人で映って楽しそうにしているところを観察をして，今だったらインスタやユーチューブなどもありますから，そういういろいろなSNS上でやりとりなどをすると．そういう楽しみ方になっているのだという先行研究があります．それをベースとして，そういう研究をする学生には読むように言って，そこから始めることが多いのですが，それはアイドルだけではなくていろいろなところに広がっているなと思うのです．スポーツ選手で，羽生結弦さんが他のスケート選手と仲良くしている様子を見るのが好きなファンというか，応援している人がいます．それは疑似恋愛対象というより，それぞれの自分が好きな人たちが仲良くしているのを観察する楽しみ方，そういう愛情の注ぎ方をしていると．だからアイドルだけではなくて，そういうスポーツ選手にも広がっているだろうし，他のいろいろなジャンルにも広がっていると思います．

「みんな」の内側と外側

それで最初の話に戻ると，そういう観察をして楽しむという楽しみ方が動物にも広がり，猫だったら猫が好きな人がいると．10年前に大村先生が研究されたペットロスというのは，自分の家族として，亡くなったらペットロスの状態になるということでした．だから自分の家族ではない別の動物が亡くなっ

ても，別にそれはペットロスではないわけです．でも今は，猫が好きな人はいろいろなところにいて，自分の家族として直接世話したり，愛情を注いで一緒に生活していた経験がなくても，そのように愛情をそそぐわけです．

これはいいことでもあるのですが，一方で観察者化というのは，自分が愛情を注ぐ対象と，そうではない対象を線引きをするというところもあります．例えば，コロナですごくいろいろな大きな事件などがありましたが，有名人の人がコロナの時にいろいろな誹謗（ひぼう）中傷を受けて，自ら命を絶つという出来事が幾つかありました．その中に，猫を飼っていた人がいたのです．猫を飼っていた人がそういう結果になったのですが，その時に，その人の SNS 上に「猫はどうなったのだ」「猫をそのまま放っておいて，自分だけそういうことをするのは許せない」というように，そこでもさらに誹謗中傷が来たのです．

つまりその人の行動や，その人の猫などを観察して，そこで猫のほうは自分たちの愛情を注ぐ対象で，飼い主のほうはそうではないという線引きが行われているように，その時に自分には見えたのです．そして結局，猫は別の飼い主に飼われていったということがありました．

そういういろいろな社会の流れの中で，私たちが「みんな」として捉える範囲の中に，今まで思っていた人だけではないいろいろな存在が入ってきて，お互いに支え合ったり愛情を注いだり，そういう関係の中で社会をつくっていくという流れはあるのです．それは非常に素晴らしいことだと思いますし，今までペット産業などで，そういう猫も含めた動物の命というものに対して，どのように捉えるかということを考え直している流れはあると思います．ただその一方で，やはりそこで「みんな」の中に入っている存在と，そうではない存在とを線引きしている現状もあるかと思います．

ということで，ここでお話ししようと思ったのは，みんなで生きるということを考える時に，その「みんな」というものの内側と，もしかしたら「みんな」ということの外側にもいろいろな存在がいて，そのことも考えていくことが大事なのではないかと，社会学の猫社会学ということから思ったということです．何かの参考にしてもらえればと思います．

（社会学部教授）

2022. 10. 27（木）

話し合いについて

吉 田 寿 夫

今日は何について話すかというと，多くの他者と共に生きていくうえで非常に重要になるであろう「話し合い」ということについて，日頃思っていることやゼミ生に伝えていることを話させていただきます．

望ましい話し合いとは

まず，話し合いの目的に関わる「望ましい話し合いとは」ということに関して話します．

世の中で話し合われることのほとんどは，「どのような社会や生き方を良しとするか」や「社会や人生においてどのようなことを重要だと考えるか」といった，個々人の価値観や信念によって意見が異なることになる事柄に関するものだと思います．そして，価値観や信念といったものは，通常，人によって（言い換えれば，各自がどのような経験をしたり，どのような教育を受けてきたかなどによって）異なるとともに，「どう考えるのが正しいか」について論理的に明確な結論を下すことができるものではないと思います．また，そのときの個々人の立場や置かれている状況，話し合われている事柄に関する利害などによっても意見は当然異なってくるでしょう．ですから，議論をしても，ほとんどの場合，意見は収束しないと思います．多数決をとることなどによって集団としての意思決定がなされたとしても，それは意見が収束した，すなわち，「みんなの考えが 1 つになった」ことを意味してはいないと思います．当然のことながら，ほとんどの場合，決まったこととは異なる意見を持ったままの人は存在するでしょう．

しかし，私は，それが当たり前であるし，それでいいのであって，収束する必要はないと思います．なぜならば，「収束しなくても，“なぜそう考えるのか”ということを重視しながら自分とも他者とも批判的に対話をすれば，多くの場合，それまでの考えが揺さぶられ，問い直しがなされる」と思うからです．批判を受けることは，多くの場合，自身の考えに対する問い直しのきっかけになり，当該の事柄についてそれまでよりも多面的であったり深かったりする思考をすることが必要になります．また，当該の事柄に対する自身の態度についても問い直す必要が生じることがあるでしょう．さらに，他者の考えに対して批判的な意見を表明する際にも，相手に納得してもらうためには，他者の考えの根拠についてしっかりと吟味するとともに，自身の批判的意見の根拠についてもしっかり考えてみることが必要になると思います．それから，

自身の批判的意見に対して批判を受けることも，さらなる問い直しのきっかけになるでしょう．

以上のことから，私は，ただ相手を非難したり否定したりするのではなく，また，一方的に自身の意見の表明のみをするのでもなく，互いの主張の“なぜそう考えるのか”ということに注目し，相互に批判をし合いながら話し合うことは，自分とは異なる意見を表明する他者の思いや，異なる意見を表明する他者の背後に存在する（立場や置かれている状況といった）種々の事情に対する理解の促進ということを含む，当該の事柄についての各自の認識を進展させる（言い換えれば，考えを広げたり深めたりする）ことになると思っています．「確かに，こんなふうに考えるのもありだなあ」とか「こんなことも留意しておく必要があるんだなあ」とか「この人がこんなふうに考えることには，こんな事情があるんだな」といったものです．

多くの場合，話し合いはメンバーの意見が最も良いと考えられる 1 つのものに収束することを目指して行なわれているものと考えられます．また，多くの人は，話し合いの主な目的，というよりも，話し合いの意味ないし意義は，最も良いと考えられるものへの意見の収束にあると思っているものと考えられます．しかし，私は，話し合いにおいては，この「意見の収束」ということ以上に，自分とは異なる意見を表明する他者の思いや背景に対する理解の促進ということを含む，「各メンバーの，問題になっている事柄に関する認識の進展」が重要だと考えています．なぜならば，このような認識の進展は，当該の事柄に対する各自の動機づけ（すなわち，当該のことに関わろうとする気持ち）を高めるであろうとともに，他者と協調しようとする姿勢の形成につながる可能性も高いと考えられるからです．そして，「考えが揺さぶられて，ぐらつく」こと自体が，主に，多様な考えについての理解および許容の促進につながるであろうことから，社会の分断の抑制につながるとも思っています（もちろん，「意見がより良いと考えられるものに収束することが重要ではない」と言っているのではありません）．

ちなみに，最近，安部元首相の国葬に関わって，賛否が大きく分かれ，社会の分断ということが危惧されました．しかし，多様な意見が持たれること自体は当然のことであり，それ自体は基本的に問題がないとともに，このようなことに関する意見が収束するような社会の方が危険で，気味が悪いとも思います．そして，意見の結論は異なっても，自分とは異なる意見についても耳を傾け，理解しようとし，自分の考えが絶対的なものではないという認識が育まれれば，社会の分断は多少なりとも抑制されるものと思います．また，当然のことながら，互いの主張の why に注目しながら他者と相互に批判し合う際には「まずは相手の発言を傾聴すること」が非常に重要になると思います．

劇作家の平田オリザさんという方は，「ディベートは，話す前と後で考えが変わった方が負け．ダイアローグ（すなわち，対話）は，話す前と後で考えが変わっていなければ意味がない」と述べておられるそうですが，私も同様に思います．そして，このように考えると，ディベートという活動は，勝ち組，負け組といったものを発生させるという意味で，望ましくない面を多分に有していると考えられます．大げさに言えば，「社会の分断

につながりやすい姿勢や行為を促している」ということです（ただし，「ディベートに有用な面はまったくない」と主張しているのではありません）．

なお，当然のことながら，主張の是非について明確な結論を下すことができない事柄だからといって「各自が勝手に判断をし，それに沿った行動をしても良い」というものではなく，絶対的な答えがない事柄であるからこそ，「偏った独善的な考え方をしてはいないか」ということについてじっくり考え，他者と議論をすることが重要になると思います．

話し合いの方法

以上が今日私が最も伝えたかったことなのですが，最後に，「話し合いの方法」ということに関しても，思うことを少し述べます．

話し合いの方法に関しては，日本では，小学生のときに，「発言したい人は手を挙げる」とか「聴き手の方を向いて話す」とか「聴き手も話し手の方を向いて聴く」といった，基本的（？）で杓子定規だと言えるであろう型が教えられ，その後は，それらに対する問い直しがなされないままになっているのが現状の多くであるように思われます．そして，ゼミや少人数の演習形式の授業で学生さんたちに接していると，円滑かつ有効であると考えられる話し合いがなかなかなされないとともに，話し合いの方法に関して，種々の非合理的な信念（すなわち，妥当ではないであろう思い込み）を抱いている，ないし，型にはまった固い考え方をしているように推察されます．また，「話し合いの方法について考えたり話し合ってから話し合う」ということが，まったくと言っていいほどなされていないように思っています．

ここで，大学生の話し合いを観察していて思う問題点の具体例を挙げると，まず，「“批判”と“非難ないし否定”を混同し，批判を“してはいけないものだ”と考えているのではないか」ということがあります．私は，批判というのは，本来，より良い考えを構築するためになされるべき面が強いものであり，人を攻撃したり排斥したりする意味合いを多分に有している非難や否定とは異なるものだと思っています．また，「他者の意見を無批判に受け入れてしまう」ことや，それとは逆に「自分の意見が論駁されることに対する素直さや潔さが欠如しているのではないか」ということ，さらには，「賢い（と思われている）人の意見が正しいと思い込んでしまうこと」，「“司会は意見を言ってはいけない”とか“一度決まったことは蒸し返してはいけない”などと思い込んでいるのではないか」ということ，などです．

それから，「（すぐに話し合いに入らずに，ないし，いったん話し合いを中断して）個々人でのシンキング・タイムを設ける」とか「ときには，批判役ないし批評役や，話し合いの過程についての批評役，といった役割を設ける」などといったことが有用だと思っています．また，「話し合いの方法について考えたり話し合ってから話し合う」という，物事を行なう過程を重視した学びをしていってほしいと思っています．

今日の私の話は以上です．傾聴してくれて，ありがとうございました．

（社会学部教授）

Ⅴ．大切なこと

2022. 11. 1（火）

コスパを度外視し，本気で取り組んでみよう

松　村　　淳

最近気になっていること

本日は今週のチャペルのテーマである大切なことについて，私が日頃思っていることを述べたいと思います．

近年，ライフハックという言葉を耳にするようになりました．みなさんは聞いたことがありますか？ライフハックとは，本来の意味は，情報処理業界を中心とした「仕事術」のことで，いかに作業を簡便かつ効率良く行うかを主眼としたテクニック群のことを指します．しかし，近年は，仕事や生活など，人生のあらゆる場面で少しでも合理的で効率の良い人生をおくるための，仕事や生活上の小技の束のことを指すようになっています．ライフハックを題した本はベストセラーになっています．また，「チート」という言葉もよく耳にします．こちらは，合法的なズル，と言うと言い過ぎでしょうか．いずれにせよ，こうした言葉や小技が流行るのは，人生をゲーム的に捉えて，要領よく，効率よく，合理的に生きていこうとする志向が根底にあるような気がします．

ライフハック技術はたしかに便利です．僕も活用しているものがあります．しかし，そうした志向性を主軸に据えて生きようとすると，全てが打算的になり計算高くなります．

この人と付き合ったら得か？損か？このサークルに参加するとどんなメリットがあるか？この先生のゼミは就職に有利そうか？

それから，みなさん，コスパという言葉も好きですよね．

この授業は楽に単位が取れそうだから興味ないけど履修する，こうした行動はコスパを意識していますね．コスパが良い，ということはどういうことかというと，かけた労力よりもリターンが大きくなることです．

若者の恋愛を研究しているある家族社会学者は，最近の若者の恋愛離れ，について，コスパが悪いから恋愛はしないのだ，とレポートを出していました．結婚がゴールであれば，結婚というゴールと結びつかない可能性のある恋愛はコスパが悪いのです．人生を合理化，最適化して，コスパが悪いから恋愛をしない．そこで皆さんは「何」を節約したことになるのでしょうか？時間？お金？

思い通りにならない自然から学ぶ

私は去年，リコラボという学生団体を立ち上げ，活動を開始しました．SDGs に資する様々な取り組みを学生主体でやっていく団体です．その主たる活動に神戸市北区に 3,5 ヘークタールの休耕田を借りて，里山

まるごと再生させようという壮大な計画があります．空き家も借りていて，今月からクラウドファンディングに挑戦し，集まった資金と助成金を併せて，リノベーションを実施して，学生の地域活動の拠点を作ろうとしています．現在，関学の学生を中心に口コミだけで 70 名ほどの学生が参加してくれています．ファームには，小麦を植え，来年は水田も造る予定です．

さて，そんな里山での活動を通じて色々と学ぶことがあります．一つは思い通りにならないことが多い，ということです．典型的な事例を一つお話します．

私たちのファームの隣の谷には，お世話になっている NPO の方が棚田を再生させていて，米をつくっています．僕たちも田植えと稲刈りを手伝っています．しかし，今年はイノシシに田んぼを荒らされて，収穫直前の稲が全滅しました．かなりショックでした．去年は皆で刈り取ったお米を精米して，食べましたが，とても美味しかったです．今年も同じように，刈り取りをして，11 月頃には新米が食べられるなあと当然のように考えていました．しかし，今年は残念ながらそれは叶いませんでした．

田んぼは，農業はそんな不果実性のかたまりです．人間は不確実性が苦手です．統計学は不確実性を乗り越えようとしてきた人間の営みの結果として発展してきました．都市もそうですね．自然など，コントロールできないものはほとんど排除されています．

都市に住んでいたら，入力したら必ず想定通りの結果が出力されて帰ってきますよね．牛丼屋に座って牛丼を注文したら牛丼を出してくれる，注文してものが出てこなかったら文句を言えばいい．しかし，イノシシに荒らされた稲は誰にも文句が言えません．昨年植えた大麦は一部が赤カビにやられました．麦茶にする予定でした．それも誰にも文句は言えません．結果を受け入れるしかないのです．不確実といえば，人間の命も不確実ですよね．

解剖学者の養老孟司さんは，現代人は自分が死なないと思っている，と述べています．昨日までの生が明日以降も続くと思っていると．だからこそ，将来の目標とか，1 年先の旅行の予定も，平気で立てられるんだと養老さんはおっしゃっています．都市に住んでいると，なおさらそれを感じます．都市は死を徹底的に隠蔽します．死を見たことがないから，みんな死なないと思っている．誰かの死を経験することで，自らの，人間の不確実性を思い知るのです．都市に住んでいる僕たちは不確実性ということに向き合うことが極端に少なくなっています．

話を農業に戻します．僕は，もともとは全く興味がなかった農業に挑戦することで，不確実性と付き合うことを学びました．どれだけ手をかけて育てても，うまく行かないこともある．もちろん，うまく育つこともある．手をかければかけるほど，しっかり育ってくれます．

ライフハックやチートと行った言葉に反応する人たちは，明日のために今を犠牲にすることに慣れきった人たちだと思います．言い換えると，ある目標の達成のために，辛い日々をおくることを厭わない人です．だからこそ，ライフハックやチート術を使って，少しでも楽に日々を送ろうとするのです．

科学者の福岡伸一さんは，生命は動的平衡状態にある，といいます．私たちの体を構成している細胞は数ヶ月で多くが入れ替わって

いる．それでも「私」という個体が存在し続けているのです．つねに動きながら，平衡状態を保っているのです．鴨長明の「行く川の流れは絶えずして元の水にあらず」ですが，私たちが眺めている川の姿は変わりません．

つまり人間と，人生は過程，つまりプロセスそのものなんです．つまり明日，ではなく，今日こそが人生なんです．

今日一日を真剣に生きる

だから，明日ではなく，今日を大事に生きてほしいと思います．それができたら苦労しないよ，とおっしゃる方も多いかもしれません．今日を大事に生きるコツは，好きなこと，夢中になることを見つけることです．先ごろ亡くなった京セラの稲盛和夫さんのモットはード真剣に生きる，でした．ドがつくほど，真剣に日々を生きていれば必ず結果はついてくる．そう，結果は目指すものではなくて，後からついてくるものだと思います．

私事で恐縮ですが，私は，文章を書いたり本を読んだりすることが大好きです．研究も執筆活動も大好きです．昨年と一昨年と二冊本を書かせていただき，現在も３冊目を書いています．本を書くためには，10 万字，15 万字という文字をパソコンに打ち込んでいきます．加筆修正を繰りかえすので，一冊の本をつくるのに，20 万字以上の文字は打ち込んでいると思います．

こう言えば，途方も無い苦行のように思えますね．でも，当の本人は楽しくて仕方がないのです．書くことが好きで好きで，毎日それをやってたら本が出来ていた，というのが正直な感覚です．日々，ド真剣に好きなことと向き合っていたら本という結果がついてきた，という感じです．

昔，ある新聞の人生相談に，漫画家になりたい高校生の相談が掲載されていました．彼は漫画家になりたくて，毎日３時間は漫画を書くようにしている．そんなに頑張っている自分ですが，将来漫画家になれますか？という内容でした．おそらく，それくらいがんばっていたら将来はチャンスがあればですが，漫画家になれるでしょう，という優しく，背中を押してくれる答えを期待したのでしょう．

しかし，回答者の答えはこうでした．「3時間もがんばっている」，と言っている時点で漫画家には向いてない．漫画家になれる素質のある人は，親にいつまで書いてるの！と怒られて強制的に電気を消されても，布団の中に潜り込んで寝たフリをして，そこから朝まで書く，極端な話，書かなかれば死ぬ，というくらいの，そんな人が漫画家になれると回答していました．

それだけ「はまれる」，夢中になれることがあったら苦労しないよ，という声が聞こえてきそうです．たしかに，よく，やりたいことが見つからない，という学生に会います．というか，やりたいことがある学生にあったことがあまりありません．

では，人は，どのように好きなことに出会うのでしょうか．ぼーっと生きていれば，ある日突然出会うのでしょうか？僕は，とりあえず，これだと思ったことを全力でやってみること，につきると思います．

冒頭で，リコラボの話をしました．まだ，海の物とも山の物ともつかぬ存在だったリコラボに初期メンバーとして関わってくれている子がいます．現在も中心メンバーとして頑張ってくれています．彼女は，昨年はファー

ムにやってきて農業をすることに，あまり積極的ではありませんでした．ファームに行けない理由を次々と繰り出しては，雑草のアレルギーがあるからしんどい，バイトがあるから，などと，行けない理由を並び立てていました．ファームに行っているメンバーが偉くて，行けてないメンバーはだめだ，みたいに言わないでほしいなどと，僕に文句を言ってきたりもしました．

しかし，ある日，気がついたそうです．彼女は当時２年生，来年は３年生で幹部になる，どうせやるなら，真剣に，本気でやってみようと．マインドセットを切り替えたらしいのです．そこから彼女は生き生きとし始め，作物を育てる楽しさに気がついたそうです．

彼女のように，どうせやるなら，ド真剣になって本気になって取り組んでみると，対象を好きになってしまう可能性があります．対象を好きになってしまえば，ほっといてもヤルので，何かしらの結果が後から付いてきます．リコラボの農業も，僕が書いている本の執筆活動もコスパが悪いです．でも毎日とても充実しています．僕は両方にド真剣に取り組んでいるからです．

結果はあとからついてきます．みなさんもなんでもいいので，ド真剣に取り組んでみてください．きっと充実した学生生活が送れます．

（社会学部准教授）

2022. 11. 2（水）

大切なこと？

内　田　充　美

はじめに

チャペル共通テーマは「大切なこと」．今日のわたしのテーマは最後にクエスチョンマークがついて「大切なこと？」です．

大切なこと＝得意なこと？

わたしにとって，たぶん，得意なことと言えるのは３つあります．ひとつは言語．英語は仕事にしていますし，そのほかの言語もすこしできます．まぁ，これはプロとしてやっていること，仕事ですから，当たり前といえば当たり前のことです．今日はこの話はしません．

２つめは水泳です．じつは大人になるまで泳ぐ機会がなかったので，まったく泳げませんでした．小さい頃に川で手作りのいかだから落ちて流されかけたことがあります．中学校にはプールがなく，高校ではわたしが１年生の時からちょうどプールが建て替え工事に入って授業がほとんどありませんでした．泳げないことはずっとコンプレックスに感じていました．しかし，大人になって，呼吸器系の病気になりかけたのをきっかけに，20年くらい前に教室に通い始めて，４泳法を泳げるようになりました．ゆっくりですが，１キロでも泳ぎ続けることができるようになりました．人生の半分以上泳げなかったのですから，自分の努力で今は大切なことになっている．これはわりと胸を張っていいことなのじゃないかなと思っています．

今日の話は３つめのことがメインです．大学生だった頃の話から始めます．わたしが大学生だったころ，部活は管弦楽団に所属していました．入学してから初めてチェロを弾き始めて，毎週練習に参加して定期演奏会で弾く．とても充実した楽しい日々でした．アルバイトでお金をためて，先輩といっしょに東京まで，ドイツの名門オーケストラのコンサートを聴きに行ったこともありました．大学卒業後，会社勤めをしていましたが，よく仕事のあとに，クラシックのコンサートに行っていました．かならず，事前にコンサートの演目の曲は通勤電車の中でなんども聴いて，予習を完璧にすることを習慣にしていました．こんなことをしていた頃，好きなことはなんですか，と尋ねられたら，迷わず，音楽，と答えていました．大切なこと，それは，音楽です，と．

いつも一緒だった――長い別れと再会

わたしと音楽との出会いは，３歳になるか

ならないかの頃に遡ります．毎週，ピアノのレッスンに行かされました．これが，辛くて辛くて，毎週，声が枯れるまで泣いていたことばかりを覚えています．10 歳以上年の離れた従姉がいて，この従姉が東京芸大に入ったんですね．それで，親は，ひょっとしたら自分の子供も，と思ったのかもしれません．ものごころつく時には，毎日最低 1 時間の練習があたりまえになっていました．まじめに毎日練習していますから，そこそこ上達はします．でも，それは，ただ，毎日練習していたからであって，特別な才能があるわけではありません．高校生になって，音楽の道に進むことを考えて，片道 2 時間以上かかるような遠いところの大学の先生の家までレッスンを受けに行った時期もありましたが，特に力が伸びたわけでもなく，情熱がふくらんだわけでもなく，やがて，高校のみんなと同じように，大学文系への進学を目指すようになりました．

社会人になると，昼だけでなく夜も，平日だけでなく週末も仕事をしていました．大学院に学生として戻り，その後研究者になってからはずっと，3 時間も眠れない時期が続きましたから，自分で演奏する機会は全くなくなりました．弾けないのは仕方ない，そういって自分に言い聞かせる日々です．自分は音楽がこんなに大好きなのに，置かれた状況のせいで好きなことができない，と思っていたのです．

事態が変わったのは，例の，年の離れた従姉と再会したことです．あるきっかけがあって，この従姉がピアノのレッスンをしてくれることになりました．数十年のブランクを経てピアノを練習しはじめたのが，今から 10 年くらい前のことです．小学生の時に習っていた教本まで戻って，基礎からやりなおしです．毎日は練習できないけれども，できる範囲で努力を続け，海外出張に行くときも，練習できる場所を確保していました．発表会を控えた出張では，王立音楽院の練習室を予約してもらって通ったこともありますし，ロンドンの駅ピアノで毎朝早起きして練習したこともありました．ずっとやりたかったことがとうとうできるようになった，と満足感を強く感じていました．

こだわりを捨てて前を向く

さて，2020 年になりました．コロナウィルスの蔓延のため，授業も会議もオンラインです．ピアノのレッスンも受けられなくなりました．そこで，わたしが感じたことですが，これが，なんと，意外なことに，解放感でした．友人に会いたい，対面で授業をやりたい，水泳に行きたい，と思いましたが，ピアノを弾きたいと思うことは全くなかったのです．家でもぱったり弾かなくなった．じつは，音楽はあんまり好きじゃないんだ，ということに気づいてしまいました．考えてみると，こうやっていつもヘッドセットをつけていますが，音楽を聴いていることはまずありません．気持ちが乱れるからです．いわゆる BGM は大の苦手で，BGM が辛くてお店から出ることもあります．このヘッドセットでは，だいたい外国のラジオ番組を聴いています．聴き放題のサブスクリプションサービスに入ってみた時も，2，3 日で音楽は聴かなくなってしまったので，結局，お試し期間のみで終わりました．

何が言いたいかというと，ずっと大切だと思っていることは，ひょっとして，そんなに

大切じゃないかもしれない．特に，なりゆきで続けていること，あたりまえのようにやってきたこと，特に，得意だと思ってきたこと，身体の一部のように感じていることは，一旦すこし突き放してみて，今の自分にとって本当に大切なのかどうか，自分で決め直してみるのもいいかもしれない，という話です．こだわることでしんどくなっていませんか．それ，本当に大切なものですか？　距離をおいてみることが正解ということもあるかもしれませんね．こだわりを断ち切るのは勇気の要る判断ですが，それ，大切だと思い込んでいるだけじゃないでしょうか？　人間関係もそうかもしれませんね．．．思い当たることがありますか？

それ，ほんとに大切なこと？　これが今日のわたしからのメッセージです．

（社会学部教授）

2022. 11. 3（木）

大胆に生きる

Timothy O. Benedict

さて，イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家におられたとき，一人の女が，極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り，食事の席に着いておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた．弟子たちはこれを見て，憤慨して言った．「なぜ，こんな無駄遣いをするのか．高く売って，貧しい人々に施すことができたのに．」イエスはこれを知って言われた．「なぜ，この人を困らせるのか．わたしに良いことをしてくれたのだ．貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが，わたしはいつも一緒にいるわけではない．この人はわたしの体に香油を注いで，わたしを葬る準備をしてくれた．はっきり言っておく．世界中どこでも，この福音が宣べ伝えられる所では，この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう．（マタイによる福音書 26 章 6-13 節）

Money Doesn't Lie

皆さん，こんにちは．今月から新しいチャペルシリーズが始まり，今日は「大切なもの」について少しお話しさせて頂きたいと思います．さて，自分にとって何が大切なのかを確認する方法についてご存知でしょうか．この方法は自分がどこにお金を使っているかをチェックすることです．「お金は嘘をつかない」と言う表現はありますよね．英語でも同じ表現があります．Money doesn't lie．では，みなさんも少し考えてみて下さい．自由に使えるお金がある時，それを何に使いますでしょうか？これで自分は何を大切にしているのかが大体わかるのではないかと思います．

大胆な行動をする意味

昔の話になりますが，私はアメリカで大学生だったころ，まあ，どちらかというとあまり自分にお金を使わないタイプでした．というのは，そもそも自由に使えるお金はほとんどなかったので，よく言えば質素な生活，悪く言えばとてもケチな生活を送っていました．ただ，時々「ドーン」と財布からお金が出る時がありました．それはどういう時かというと友達と会いに行くための旅費を払う時でした．私はアメリカ人ですが，日本で育ったため，多くの友達はインターナショナルの友達でした．大学に入ってから，その友達は世界中の大学に散らばりましたが，休みが来た時は安い航空チケットを狙って，会いに行

くのが私にとって大きな楽しみでした．場合によっては友達と数日間だけ会いに行くために結構なお金を払うこともありました．でも不思議なことに私はこのような旅費を払うことをもったいないと思うことは一度もありませんでした．私にとって友達と会うことはお金に変えれない貴重な思い出作りのチャンスでした．

さて，なぜこんなケチな私がこのように友達と会うためにバイトで貯めたほとんどのお金を出して，もったいないと思わなかったのでしょうか．というのは近くにも楽しく遊べる友達もある程度いましたので，お金の使い方の観点から考えるととても効率の悪い楽しみ方でした．今振り返ると，さまざまな理由はあったと思いますが，その中の大きな一つは，私が大胆に何かをすることにやり甲斐を感じていたからではないかと思います．お金を払って遠い友達に会いに行くと向こうはもちろん喜びます．一日だけ会うためにお金を使うことは普通に考えたらもったいないですが，それを払うことによって相手が私にとってどれだけ大事なのかを伝えることができたのです．このように土壇場で大胆なことをするのはとても好きでした．

イエスに香油を注いだ女性

このような性格だからこそ，私は今日読んだ聖書箇所がとても好きなのかもしれません．今日のお話はある女性がとても高価な香油をイエスの体に注いだお話です．とても大胆な行動です．そして，イエスの周りにいた弟子たちはすぐに怒って，「もったいない！」と指摘します．その高価な香油をもし売ったら，貧しい人にその沢山のお金を施すことができたわけです．しかし，イエスは「もったいない」とは言いませんでした．むしろ，この女性は良いことをしたと誉めます．次のように書いてあります．「なぜ，この人を困らせるのか．わたしに良いことをしてくれたのだ．貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが，わたしはいつも一緒にいるわけではない．この人はわたしの体に香油を注いで，わたしを葬る準備をしてくれた．」

ここで注目したい点が二つほどあります．一つ目は，イエスは貧しい人への施しを否定しているわけではないということです．聖書の中には「貧しい人」という言葉が 2000 回ぐらい現れると言われています．イエスは貧しい人を助ける大切さについて何度も何度も語っていますし，これはキリスト教の教えの大きな柱です．ですから，ここではイエスはその香油を売ってお金を貧しい人に施すことの正しさについて反対しているわけではありません．

もう一つ注目したい点は，イエスが香油で注がれたことは自分を葬る準備であると言ったことです．この香油の出来事は実はイエスが十字架にかかられる 6 日前のお話です．イエスは自分が間も無く十字架に付けられることは十分に理解していました．おそらく，この頃にはそれしか頭になかったと思います．通りでイエスはこの女性の行動は彼に対しての大胆な愛の表れであったと理解したのです．そして，イエスはこの行為を見て，とても嬉しかったのです．

私もこの女性の大胆な行為は大好きです．もちろん，そのお金で貧しい人を助けることもとても良いことです．しかし，ここではイエスはこの大胆な愛の行為にはそれを上回る良さがあると言うのです．つまり，困ってい

る人を助けてあげることは当たり前のことです．私たちは貧しい人を助けることを特別なことのように高く評価しがちですが，考えてみれば，これは何か特別なことではなく，本来なら当たり前なことであるはずです．それに比べて，この女性のように，高い香油を一気に一人の人間に注ぐことをするには深い愛と相当の覚悟が必要です．この女性は自分が大事にしてきた財産を愛の表現として全部イエスに捧げました．これはそんな容易なことではありません．

イエスが見せた大胆な愛

最後になりますが，イエスがこの女性を褒めた背景にはもう一つの理由があると私は思います．それはこの女性の行為とイエスご自身が６日後に十字架にかけられることがイエスの心の中で重なったからだと思います．この香油はとても純粋なものでした．高価であった理由は他の安い香油などとミックスされていない，不純物のない香油だったからです．この行為をみて，イエスは６日後の十字架で自分は，何も罪を犯していなくても，人々の罪を清めるために自分の命が注がれることを思い出したのではないかと思います．神の子が人を救うために命を捨てることは当然，当たり前なことではなく，信じられない話です．ある意味，もったいない話です．しかし，これがイエスが世界に見せたかった大胆な愛の行為でした．

この女性のお話しは私たちの人生の中で何が一番大切なのか，そして，その大切なものに対してどのように行動をすべきかについてとても考えさせるお話しであると思います．なかなか日々の生活に適応しにくいかもしれませんが，私はできるだけ社会の考えるあたりまえな行動や，やるべきことだけに囚われず，時には大胆な愛を示せる様な生き方を大切にしたいと思います．今日のお話を通して皆さんもぜひ，社会のあたりまえに制限されず，大胆な行為を恐れない人生の歩み方について考える機会となれば嬉しいです．

（社会学部助教，宣教師）

2022. 11. 9（水）

今ここに生きるということ

打　樋　啓　史

主なる神は，土の塵で人を形づくり，その鼻に命の息を吹き入れられた．人はこうして生きる者となった．（創世記 2: 7）

1 秒の大切さ

「大切なこと」という共通テーマで，今日は「時間を生きる」ということについて話したいと思います．最初に一つの詩を，一部省略して紹介します．

> 1 年の大切さを知るには，落第した学生に聞くと良いでしょう
>
> 1 時間の大切さを知るには，待ち合わせをしている恋人に聞くと良いでしょう
>
> 1 分の大切さを知るには，電車に乗り遅れた人に聞くと良いでしょう
>
> 1 秒の大切さを知るには，たった今事故を避けることができた人に聞くと良いでしょう
>
> 10 分の 1 秒の大切さを知るには，オリンピックで銀メダルに終わった人に聞くと良いでしょう

以前，ある人がこれを引用して話されているのを聞いて，「いいな」と思って調べたところ，ある会社の広告の言葉のようなのですが，詳しい出典は分かりませんでした．「はっ」とさせられる言葉だと思いませんか．時間というのは，数字としては等しく同じように流れていきます．けれども，自分が置かれた状況によって，その大切さや意味が全く異なってくるということです．同じ 1 分であっても，その 1 分の意味が異なってきます．そこで，皆さんは毎日時間をどのように生きているか，考えてみてほしいのです．時間が速く過ぎているか，遅く過ぎているか，感じ方は色々だと思います．

私自身は割と時間を大ざっぱに捉えて生きてきました．しかし，ここ数年で 1 秒の大切さを意識するようになりました．そのきっかけは，大学のアメリカンフットボール部の副部長をするようになったことです．今年で 5 年目なのですが，私は宗教主事なので，チームチャプレンのような役割もしていて，いつも試合の前にチームのメンバーの前で聖書を読んでお祈りをします．ですから，できる限り試合に同行して，皆が真剣に戦う姿に

励まされてきたし，多くのことに気づかされてきたのですが，その気づきの一つが，アメリカンフットボールというスポーツは，まさに秒が結果を左右するということでした．どのスポーツでもそうかもしれませんが，アメフトは特にそういう面が強いと思います．この５年間，最後の数秒で逆転して勝った，数秒で結果が変わった，そういう場面をいくつも見てきました．

また，試合中に時計をどう止めるか，どう進めるかが，試合の結果を，明暗を分けるスポーツだということも分かってきました．アメフト部に関わらなければ，おそらく１秒の大切さを意識せずにずっと生きていたと思います．最近，朝の身支度などをしながら，時計を見て，「1 秒って結構長いな」と思うようになってきたというぐらい，自分の中ではすごい変化です．

父の最後の呼吸

別の話ですが，６年前の６月に私の父が亡くなりました．その年の春先から調子が悪くなって，いくつか検査を受けると末期の肺がんであることが分かり，もう手遅れだと言われました．どんどん弱っていって，がんの発見から 40 日後に，最期は淀川キリスト教病院のホスピスで亡くなったのですが，家族全員が集まって父の最期を看取ることができました．

医師が「呼吸がもうあとわずかだと思います」と言いました．そう言われて，悲しい状況なのですが，みんなで父の一息一息に注目していました．だんだんと呼吸は不規則になっていき，呼吸と呼吸の間隔が空いていくのです．そして最後にふうーっと息を吐いて父親は亡くなりました．これが私の父の最後の呼吸だったのです．呼吸が止まった後も，心臓はまだ動いています．それもやがて止まって，父は地上での歩みを終えて，神様のもとに召されていきました．

とても悲しい瞬間でしたが，私はこの時，「人間って息をして生きているんだ」と改めて気づいたのです．もちろん，クールにそんなことを考えていたわけではありません．とても悲しかったのですが，人間は呼吸をして，息をして生きているのだという当たり前の事実に，父が最後の一息を吐いて亡くなるのを見て，リアルに気づいたのです．誰にでも，自分も含めてそういう最後の息をする時が来るのだということも実感しました．父親が教えてくれたような気がします．

父が「俺の最後の呼吸をよう見とけよ！」とでも言っているような気がしました．そういう感じの人だったのです．お酒が好きで，ユーモアにあふれ，冗談ばかり言っている，愉快で豪快な人でした．だから，「お父さん，しゃべれたとしたら，『俺の最後の一息をよう見とけよ！』と言ったやろな」と家族で話しました．生きるということは，生まれた時から呼吸を始めて最後の呼吸をするまでの限られた時間，息を吸ったり吐いたりすること，呼吸をすることなのだと，非常に生物学的な見方ではありますが，本当に実感したのです．

今日の聖書朗読箇所，創世記の物語では，「神が人を土の塵から形づくった」と記されていました．そして，「神はその鼻に命の息を吹き入れた．人はこうして生きる者となった」と言われます．「神が息を吹き入れると人は生きる者になった」というのです．人間が呼吸をして生きているのは，自発的に呼吸

を始めて生きているのではなくて，神様から息を与えられて生かされているのだという，そういう信仰に基づく人間観がここには示されています．私は父親の最期を看取って，これは本当にそうだなとリアルに感じました．

そもそも「生きる」という日本語は，「息をする」という言葉から来ています．「生きる」の語源は「息をする」なのです．だから，亡くなること，死ぬことを「息を引き取る」と言うでしょう．息をすることと生きることはセットなのです．聖書によると，人間は神様から息を与えられて，呼吸を与えられて生きています．日々呼吸をして，最後の日には呼吸を終えて，息を引き取られて，神様のもとに旅立っていきます．私の父はクリスチャンでしたから，最後の一息を通して，自分がそのように神様に生かされていたのだということを，身をもって教えてくれたような気がしています．

「今」を生きることができない私たち

今日特に考えたいのは，私たちはそうやって呼吸をしながら，一息一息吸ったり吐いたりしながら，限られた，与えられた時間を生きているのですが，大切なのは，私たちはこの「時間」というものを「今」として生きている，「今」としてしか生きられないということです．シェイクスピアの『ハムレット』では，主人公がこう語ります．「人間は前と後ろを見る生き物だ」と．これはどういうことでしょうか．「前」とは未来であり，「後ろ」とは過去のことです．つまり，人間だけが他の動物と違って，過去と未来について考えることができる生き物だということです．

これは他の動物にはない特性です．他の動物は，本能で今を生きているだけです．人間だけが過去と未来を考えます．過去を悔やんだり，未来を心配したり，あるいは未来の計画を立てたりします．それが人間です．人間というのは特殊な生き物なのです．しかし，いくら過去や未来を考えることができても，結局それをしているのも今なのです．時間というのは今としてしか生きられない．過去と未来を思いながら今を生きる，これが人間だと思います．

それにはいい面もあります．先ほども言いましたが，過去から学んだり，未来について計画を立てたり，期待して待ち望んだり…そのように色々な仕方で過去と未来を考えることがよい影響を与えるのは事実です．しかし，今の世の中，過去と未来を考えるということが，どちらかと言えばネガティブに働いていることが多いのではないかと感じます．

過去にとらわれる．過去の失敗や傷などによって，怯えてしまったり動けなくなってしまったりする．そして未来を必要以上に心配してしまう．明日のこと，明後日のこと，将来のこと，就職はどうなるのだろう，自分の将来はどうなるのだろうと，つねに心配事でいっぱいになってしまう．

そうさせている社会・世の中というものがあります．人々をすごく心配させて，不安にさせて，それで儲けている人がたくさんいる，そういう社会だと思います．そうなっていくと，この瞬間，この１秒，この一呼吸を，「今」として生きることがどんどん難しくなってくるのではないでしょうか．心配や後悔の内に長い時間を過ごし，また「効率！効率！」と言って，未来のための計画ばかりに今を費やして，「今」を「今」としてもっと単純に生き抜くということがすごく難しい

世の中になっている．そう感じます．

こういうことも言えると思います．今，目の前にすぐにやった方がいいことがあるとします．しかし，過去や未来，特に未来のことを考えて，「明日でいいや」と思ってしまうのです．「またそのうち」とか「また時間ができたら」という発想です．私が授業で映画などを紹介して，関心をもった学生が「また時間ができたら観てみます」と言ってくることがあるのですが，そんな時，私は思うのです．「この人はおそらく一生観ないだろう」と．私の中で「またそのうち」というのは，イコール「永遠にやらないこと」です．本当に大事だと思ったら今すぐにやる，これ以外にないと思います．

そう考えるのは，自分自身の体験に基づいています．私にはよく「この本をいつか読みたい」と思って買うことがあります．でも，忙しいから置いておいて，「またそのうち」と思っていると，気づけばもう十年以上経っているというようなことがザラにあるのです．これは大事だ，これは面白い，これを読んでみたい，観てみたい，やってみたい，と思ったらすぐやる．「すぐ」が無理でも最短でやる．そうしないと人間，結局やらないし，なかなか成長しないというのが，私の経験に基づく持論です．

呼吸を意識する

過去と未来を考える生き物である人間，そのいい面もあるけれども，やはりそれによって失われているものがあるのではないか．「今」を「今」として生きられなくなっているということがあるのではないか．これは私にとって極めて大切なテーマなのです．しかし，誤解してほしくないのは，今を今として，この時間を生きるというのは，必ずしも「必死に生きろ」と言っているのではないということです．むしろ，肩の力を抜いて，神様から与えられた呼吸を，信頼のうちに，感謝のうちに生きるということ．私は，「今を生きる」という時にそれこそが大事だと思っています．

そこで，「今を今として生きる」ための一つの秘訣を紹介したいと思います．何だと思いますか．今日の聖書朗読箇所もこれに結びついてくるのですが，それは「呼吸を意識してみる」ということです．皆さんは無意識に呼吸しているでしょう．でも，あえて意識してみると，鼻から息が入って口から吐いて，そうやって自分は生きているということに気づかされます．

ご存じかもしれませんが，いわゆる「メディテーション・瞑想」と言われるもの，例えば座禅やヨガなどで，多くの場合最初のテーマになるのは「呼吸を意識すること」です．呼吸を意識するとは，今ここに自分が生きているのを意識するということに他なりません．そのことに気づくことが，自己の内面を成長させるための最も初歩の段階なのです．息を意識するという，実に単純なことです．

「そんなことはなかなかできない」と思うかもしれませんが，自分が呼吸をして生きている，それは自分が自力で生み出した呼吸ではなく，神から与えられた呼吸であり，自分はそれを一瞬一瞬，一秒一秒，一呼吸一呼吸，息を吸ったり吐いたりしながら生きている，そう意識すると，何かが見えてくるかもしれません．

チャペルアワーというのは，呼吸を意識しやすい時間だと思います．先ほどもオルガン

の前奏を聞きながら，私はずっと呼吸を意識していました．そんなことは普段できないでしょう．授業を受けたり，友達と話したり，活動したりしていると，そんなことはなかなかできないでしょうが，チャペルアワーというのは，静かになって，そういうことができる時間ではないでしょうか．これも一つのヒントにしていただければと思います．今を生きる，今この一秒を生きる，今この一呼吸を生きる，そういうことを皆さんと共有して，私にとっての「大切なこと」として分かち合えればと思いました．

（社会学部教授・宗教主事）

2022. 11. 24（木）

同じ色の石を踏んでいく，踏んでいってしまう

鈴　木　慎一郎

「遊び」とその捉え方

「大切なこと」というお題をいただきました．大切なこと，それは遊びである，と私は断言できます．私は数年前にも社会学部ウェブサイトの記事で似たようなお話をしたことがありました．私の大学時代・大学院時代の指導教員であった青柳真智子先生の業績の 1 つに『「遊び」の文化人類学』（講談社，1977 年）という本があります．素直なほうの弟子ではなかった私ですが，青柳先生の広範に及ぶ研究のうちで少なくとも遊びの研究については，僭越ながら何らかの形で継承しわずかにでも発展させていきたいと今なお勝手に思っていて，それで今日ここでも遊びの話をします．

『「遊び」の文化人類学』は，高度経済成長が一段落した戦後日本において，新書版という比較的大衆向けの形態で出版されました．日本に暮らす人々は，一定の経済的水準に達したからこそ，それまでのように働きずくめではなく，どのように有意義な余暇やレジャーの時間を持ったらよいのか考えてみよう――そんな時代の雰囲気にも後押しされた出版物だったのかもしれません．

おそらくその頃から，あるいはそれ以前から確実にあったと思うのですが，遊びにかんする支配的な言説の 1 つに，遊びが重要なのは真面目な活動を活性化してくれるからである，という言説があります．その言説によれば，真面目な活動のほうが人間にとって本来あくまで重要なものであり，お金を得るために働く，単位や資格を得るために勉強する，などがそれにあたります．そして遊びは，労働や勉強の時間の中の隙間や息抜きとして設けられ，疲れがたまっていた人はそこで元気を取り戻し，再び労働や勉強の時間へと入っていきます．リフレッシュの時間を経た人は，その後の勉強や労働をより「効率よく」こなすことができるでしょう．この言説においては，遊びも真面目な活動の役に立つように組織化されているといえます．

以前のゼミの課題から

ただし今日は別の角度から遊びの重要性について話したいと思います．数年前に私はゼミの授業である課題を出しました．

> 遊びは，遊び以外の何らかの目的と関連づける形で説明されることが多かったのですが，それに対しホイジンガとカイヨワは，遊びを理解するために遊びがそれ自体として内包している本質を捉えよう

としました．では，現代社会のなかの具体的な場面において，遊びはどのように位置づけられていると考えられるでしょうか．400 字以上で論じてください．

（ヨハン・）ホイジンガと（ロジェ・）カイヨワは，それぞれ『ホモ・ルーデンス』と『遊びと人間』という，遊び研究において絶大な影響を及ぼしてきた本を著した人たちです．遊びは，前述したような労働からの息抜きのために必要であるとか，子どもが社会の一人前のメンバーになるために必要であるといったように，遊びそれ自体とは別の目的のために有用であると論じられることが多々ありました．それに対してホイジンガやカイヨワは，遊びこそが人間の最も根源的な活動であると論じたり，遊びという活動の固有の論理を明らかにしようとしたりしました．２人はいわば遊びそのものに向き合おうとしたわけです．私がこの課題をつうじて学生たちに考えてほしかったのは，遊びにかんする前述のような支配的な言説は，今たとえばどのような場でどのような形で発せられているだろうか，そしてまた，そうした支配的な言説をすり抜けている遊びの本質のようなものは，たとえばどのように体験されているだろうか，ということでした．

ある学生が，私が予想していなかったくらい身近なところから着想したリポートを提出してきました．要約すると次のような内容です．私たちは道を歩く時，それが石などでタイル状のパターンが敷かれた道だったりすると，しばらくの間，なぜか同じ色の石だけを踏んでいったり，あるいは，石と石の間の境界部分を踏んでいったりすることがあります．何気なくやってしまうこうした行為もまた，遊びといえるのでは――そうこのリポートは提起するのです．同じ色の石やタイルを踏んでいく，踏んでいってしまう，という行為．私たちはある種の気晴らしとして行うわけですが，もしかしたらそうした気晴らしや気を紛らわすための行為にこそ遊びの本質があり，もっと大げさにいうと文化の原点のようなものがあるかもしれない．

リトルネロ

じつは，このリポートの提起と似たようなことをフランスの思想家の二人組であるジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが「リトルネロ」という言葉で論じています．「小さなネロ」ではありません．リトルネロは，音楽用語としてはリフレイン（繰り返し）と似たような意味です．リトルネロについて，芳川泰久・堀千晶の『ドゥルーズ キーワード 89』（せりか書房，2008 年，p.200）から引いておきます．

> ドゥルーズとガタリは，暗闇の中で子供が口ずさむ歌から，リトルネロ（リフレイン）について語りはじめている．まわりに何があるのか分からない混沌とした場所で，あるフレーズを口ずさむことによって，少しの安心と勇気が得られる．子供は，歌うことで自分が居られる場所，領域をかろうじてつくりあげると，ドゥルーズとガタリはいうのである．リトルネロは何にもまして，混沌の中に「自分の場所（テリトリー）をつくること」，テリトリーに目印をつけ識別できるようにすることと相関している．

ここでの「歌うこと」は，先ほど紹介したリポートにおける同じ色の石を踏んでいくという行為と，等価のものであるように私には思えます．それらはどちらも，なじみのない状況にあってもそのなかで自分でリズムを作り出すことであり，そのリズム自体が自分のテリトリーになります．

厳格に定められた制度や制約の中の，余裕とか隙間のようなものとして，遊びは重要である――それはもちろんそうなのでしょう．ただし遊びはそれよりもさらに深い意味で，人間にとって根源的で「大切なこと」である，とも，間違いなくいえそうです．

（社会学部教授）

Ⅵ．定年退職者による
最終チャペル講話

2022. 12. 13（火）

ノイズとしての「社会」
――オンライン授業から考える

田 中 耕 一

1995 年４月に関学に来ました．１月 17 日の未明に阪神大震災が起こり，仙台の女子大の教職員食堂のテレビでニュースを見ながら，時間とともに次第に被害の甚大さが明らかになっていく恐ろしさを強く感じたことを今でもはっきりと覚えています．もちろん４月にこちらに来てからも傷跡は大きくて，住むところもなかなか見つからないような状況でした．それから，あと数ヶ月でなんと 28 年間も勤めることになります．そんなつもりはなかったのですが，随分と長くなってしまって，来年の３月で定年退職を迎えることになりました．というわけで，今日は最後のチャペル講話なのですが，実ははじめてここで話したのがつい３年前なので，あまり最後という感じはなく，普通に２回目という感じで，最近感じていることを話したいと思います．

オンライン授業の経験

話の入り口は，2019 年末からの新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより，2020 年度から大学で実施された「オンライン授業」です．３年生以上の人はこの年度の授業を経験していますし，21 年度以降も引き続きオンラインで開講されている科目もあるので，１・２年生でも経験はあるのではないでしょうか．

ゼミなど少人数授業を Zoom ミーティングで実施するのは，それほど違和感を感じませんでしたが，講義をあらかじめ録画撮りしてクラウドにアップロードするオンデマンド型は，準備が大変というばかりでなく，学生の顔がまったく見えないので，はじめはだいぶとまどいがありました．ただ，少し慣れてくると，これは意外と悪くないんじゃないかと思うようになりました．これは多分，多くの教員や学生が感じたことだと思います．学生から見れば，講義動画を好きな時間に，しかも再生速度を上げたり，繰り返し視聴することもできるので，便利なのは言うまでもありません．教員から見ると，もっともわかりやすい利点は，講義を妨害する「私語」が一切ないというか，（画面の向こう側では）あるかもしれないけれど，まったく聞こえてこないということでしょう．

「私語」のない，快適な授業空間を可能にしているもの

普通の対面授業なら，教室という場で，みなさんの集まり（関係とコミュニケーション）が生じ，これをベースにして「私語」も

発生します．それに対して，オンデマンド型の授業は，この集まりをひとりひとりに分解してばらばらにします．講義をしている教員とそれを視聴しているひとりひとりの学生は，いわば一本ずつの通信線でつながり，学生が何人いたとしても，全体はそのような一本ずつの通信線の束でしかありません．たくさんの通信線はけっして相互に絡まったり，交わったりすることがありません．「私語」のもとになるみなさんの関係とコミュニケーションを遮断し，ばらばらにすることによって，教員とひとりひとりの学生との間に，一対一の関係を作り出すことが可能になるわけです．

「私語」という「騒音 noise」のない，快適で効率的な授業環境を可能にしているもの，それは，わたしたちの相互的な関係とコミュニケーション――これは「社会 society」ということばで呼ぶことができます――をばらばらに解体し，遮断してしまうことなのです．言い換えるなら，オンライン授業で得られる快適さ，効率の良さというのは，まさに「社会」を壊すことによって得られているということです．だから，オンライン授業で「社会」や「社会学」について語るのは，「社会」を壊したところで「社会」について語るという，なにか矛盾したことをしているような気がして，どうしても居心地がよくありません．

「社会」はノイズであり，セーフティーネットである

「社会」が私たち相互の関係とコミュニケーションから成っているかぎりで，「社会」は「私語」＝「騒音」と切っても切れない関係にあるわけで，そもそも「社会」とは，ひとびとの関係とコミュニケーションがつくり出す「騒音」にほかならないとさえいうことができるでしょう．

「社会」が「騒音」だなんて，何てひどいことを，と思うかもしれません．普通は「騒音」なんてうるさくて，迷惑なものでしかないからです．できれば，ない方が良い――静かに仕事や勉強，いや音楽を楽しみたい．「これから会合を開くのだが，文句を言う奴が多くて騒々しくてしかたない」．たしかに，「騒音」は必要な情報の伝達を妨げたり，ものごとの秩序だった進行を乱したりする――だから普通は悪者です．でも，時には「騒音」が役に立つときもあることを忘れてはいけません．耳を塞いでいたら，何か緊急事態が起こってもわからないし，会合などで，まさに聞く耳を持たない人はまわりの意見を無視して暴走しがちです．そういう意味で，「騒音」というのは，ある種の「安全装置 security device」でもあるわけです．ひとびとの関係が複雑にからまりあって一筋縄ではいかない――「騒音」に満ちた社会は，知らないことに気づいたり，間違いを修正するための宝庫でもあります．そういう意味でも「社会」は，まさに困った時の「セーフティーネット safety net」なのです．

「滑らかな社会」ではなく，…

授業中の私語を推奨する気は毛頭ありませんが，授業の合間に他愛のない，いっけん無駄のようにもみえる会話で盛り上がることは，もちろんそれ自体が楽しいから大事なのですが，同時に，そこで知らないことに気づいたり，もしかしたら自分の考えの間違いに

気づくなんてことだってあるかもしれません．いっけん無駄や遠回りのようにみえるできごとやコミュニケーションのおかげで救われるという経験に出会うことはかならずあるはずです．なにごともひたすら効率よくスムーズに滞りなく進めればよいということではありません．ときによっては立ち止まったり，考え直したり，やり直すことも必要です．

ついでに言っておくと，どうも近頃は，いっさいの「騒音」を排して，ものごとをまるで儀式のようにスムーズに滞りなく行うこと自体がよいことであるとされ，そのために異常なほど神経が使われているような気がしてなりません．さらに言うなら，最近は，さまざまな「騒音」をかき消して失効させるための，いわば対抗的な「騒音」とでも呼びうるものまで現れてくる始末です．批判を批判したり，まじめさを嗤（わら）ったりすることで，本来の「騒音」（批判）をかき消そうとします．そういう嘘の「騒音」に惑わされずに，「騒音」としての「社会」を大事にし，そしてそれを楽しむ余裕が欲しいものです．

今日の話も，みなさんのちょっとした「騒音」となることを祈ります．ありがとうございました．

（社会学部教授）

2022 年度　チャペル講話集

2023 年 3 月 25 日発行

発行　関西学院大学社会学部
〒662−8501
兵庫県西宮市上ケ原一番町 1−155
TEL（0798）54−6202

印刷　関西学院大学出版会